Dec. 1898
no. 477

明治三十一年十二月十日

女學雜誌

第四百七十七號

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第四百七十七號目次

◎社説
女學の懷疑時代
女性の獻身犠牲
公娼の存設公娼の寛假

◎家庭
徳川時代の家庭
三代目　隱村
孝主の威光
支那人の家政
夫婦反離の模様　ちやうてい

◎史傳
西婦傳頌　有文

◎文藝
平家第一局の的（平家物語の一節）

◎隨感
達人は達人なり仙人は俗人なり　水鳥水に跡なし
と云ふ大物常に微笑す

◎雜錄
樂界の秋色　高樹有美
[illegible]音樂會　日本音樂會の音樂會
[illegible]和音風生訣

◎時文
文學消息
[illegible]小説の行話　なにがし
（ビスマーク公傳）品　前橋案内　しら露
[illegible]　日誌定造
[illegible]發音問題
[illegible]技能

◎片々　◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する評論の卓見を陳述し、大に世上作子に問はんとするを旨とす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみを指定して所望せらるるものあらば其の需めに應ずべし

女學雜誌定價表

前金	壹冊定價	拾錢
	半年分定價	壹圓拾錢
	一年分定價	貳圓
	（内國無郵稅）	
	代金は總て前金にて[illegible]	
廣告料	一行（廿七字詰）一回	前金拾錢
	同　三回以上	一割引
	同　六回以上	二割引
送金	送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にて送らるべし郵便切手にて代用せらるる人は一割增にて計算せられたし	

明治三十一年十二月九日印刷
明治三十一年十二月十日發行
發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
（東京本局十九號）

社告

女學雜誌代金の事につき

女學雜誌は多年の讀者を有し皆な稀有の知己なれば雜誌代金滯の節も曾て御催促不申上前金切候とも引續き發送致居候場合も多くかねて廣告いたし置候ごとくに候乍然年末は可成く勘定清算致度候に付滯りの諸君は東京駒込郵便局あて小爲替にて代金送附ありたく候、尙不便の節は郵便切手（五厘又は一錢印紙）にて送られ候とも差支無之其節は一割增にて計算被下度存候。右謹告す。

十二月

女學雜誌社會計

女學雜誌

第四百七拾七號

明治三十一年十二月十日發兌

社說

女學の懷疑時代

◎都に出て繁雜熱鬧の地にもまれ、幾度か落心沮喪して、暮ゆく空に涙を催ふす年少の徒が、靜かに故鄕の天を望んで、幼なき時に遭遇した經歷を追懷して見ると、心中俄かに爛熳として、天地一時に花開くごとき心地のするものである。彼の山に鳥を追ひ、此の水に魚を釣り、大橋の頭りに月夜遊び舞ひ、裏野の末に春日草を摘みしとなど、一々眼中に映じ來れば、床しさ、樂しさは言ふ迄もなく、其山の如何にも高く、其水の如何にも深く、橋は都の何々橋よりも更に長く高かりしように記臆せられ、野は見渡す限りどれほどに廣かりしなど鮮やかに想像せられ、心中夥たゞしき愉快に滿つるものである。

◎則はち、偶として其の戀ひ慕ふたる故鄕に歸つて見れば、大きく思ひし山はホンノ小山なり、深く思ひし水はホンノ淺瀨なり、橋の小さきと、野の狹きと、眞とに歎息の外なく、彼處より彼處迄で餘程の距離と思ひし場所も、實は二三丁の間に過ぎず、故鄕の大天地と記臆せし世界は斯かる小さきものなりしかと一驚一笑するとであらふ。其上、人は皆な時世後れ、談話は皆な調子外れで、一向に面白きとはなく、家のむさくろしきと、風俗の宜しからぬとに失望して、床しく思ひし故鄕はカヽルものでありしかと大いに歎息するであらふ。之は年少の人が半途故鄕に歸つた時の感覺である。

◎然るに、此の馬鹿らしく、面白くなき故鄕が後にまた追々と床しくなつて來る時代がある、即はち、年を重ね、經驗を重ね、只管ら新奇新樣のと斗りに奔走した浮氣が少しく沈まつて來る年齡の時で、所云る老功を增すと同もに再び故鄕を床しく思ふ心が立反つて來るのである。子供の時には、只何事でも大人がエラク見へて、どうか一日も早くあのよふに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大きくなり、年が急に餘計になる工夫はなからふかと思ふ。日本中で一番に悧巧な人は、親仁と兄と叔父さんとであらふと迄で思はれたが、中ごろ少し學問をして、段々生意氣になつて來ると、親仁と叔父ほど譯の分らぬものはなく、頑固極弊極まるもので、時世の變化を知らずに只だ舊いと斗り言つて意張つて居る馬鹿な人だと思ふ丈であらふ。然し、今一歩、年をサキに取つて、更に一段の劫を積むと、成程、親仁の言ふたとは尤もだと思ふよふになる。之が丁度、幼時、其の故郷を世界一の所と思ひ、中ごろ之を小さきものと思ひ、年長けて再たび之を床しく思ふのと、同じ順序である。

◎總じて人は此の三段の變化を經るもので、其の經る間の長短はいろ〳〵あるが、到底、其の經歷を免かるゝことは出來ぬ。初めが、空想的で且つ無邪氣な信仰の時代、中頃が、小理窟で、生意氣な懷疑時代、終りが老實にして基礎ある信仰回復時代となる。此は人の一生に何度も〳〵繰反すことがあり、世の中の時勢の變化も、廻轉し〳〵して此の道行を繰反すことがある。扨て、日本女學の狀態は、今や將に懷疑時代に入らんとしつゝあることを認ため、豫じめビックリせぬ用意をせねばならぬ。

◎女學に對して試みに男學と言はんか、此の男學の方は既に一度懷疑時代を經過して、今は寧しろ第三期に這入つて居るが、女學はいつも男學のお伴で、其あとから尾いて來るものゆへ、ソロ〳〵之から初まらふと云ふのである。既に男學の經過に於て之を經驗した人は、更めて驚ろくべきでもないが、自分の事は棚に上げて、人の非斗り氣にするが人情である上に、男が女に對するときは、特に此の弊があるゆゑ、定めし、女學の懷疑時代を痛論して、其弊を指摘することが酷しいであらふとは、今より既に明白である。

◎ナゼ、懷疑時代が初まるかと云ふに、女學に於て從來遵奉せし主義が勢力を失なひ、新らしき主義は未だ勢力を得ず、所云る新日本の女が遵奉すべき道、教、女德と云ふものが未だ一定せぬからである。素と之を新らしく定むべきではない、既に千古一定して居るのであるが、其處に氣の付かぬが懷疑時代の僻で、舊習舊慣の姿が破れると同に、其中に滿ちたる精神、主義、道とも云ふべきもの迄を疑がつてかゝる、即はち方針暗黑、人心疑惑すると云ふ境界に入るのである。

◎道の道とすべきは常の道にあらず。道、當時の習慣と抱合して道德となり、一代の人心を支配するとゆゑ、道德の半は即はち習慣である。然るに過渡變遷の時代に臨み、此の習慣が一時に打破せらるゝ時となれば、勢ひ暫らく懷疑の世とならねば成らぬ。況んや、今の女學は新らしき女學で、種々の新志想、新學理が軟らかなる婦女子の頭腦を襲ひしゆへ、或は驚ろき、或は眩めき、或は果敢なみ、或は怨望して、昔しは毫も不平とせざりしとが大不平となり、甚には辛棒して斷念らめしとが慷慨の種子となつて、遂に懷疑厭世の境に入るであらふ。新らしき女學の子が追々此に接近しつゝあるを見て、實は今更の如く同情に堪へぬとである。

◎文字を知るは憂患の初めとも云ふ、左らば之を知らぬが幸福かと云へば必らずしも左樣ではあるまい。同じ憂患でも、高尙なる憂患なれば決して濫りに避くべきではない。女學の懷疑時代をも只徒らに悲しむべきではないが、左りとて又其の救ひ方、導びき方に有力の法方あるとを預じめ承知し、巧みに開悟善導の道を悉くすが、先覺たる人々の務めであらふ。今に方つての女學の要務の一つは即はち此事である。

女性の感激献性

◎尤とも散じ易く、亦尤とも凝り易きが女性の常である。散ずる時は、浮薄輕卒にして人並越えたる不所存もするが、凝る時は、熱誠貞烈にして驚ろくべき献身的の決心をする。女に二人の人あり、一は浮氣、一は貞女、同一人の女性にして此の二樣の性質を兼ねたるが即はち女の持前であるが、無論、女の理想は一方の貞女となるにある。貞女と云へば、甚はだ道德らしい名であるが、實は女の當然の理想で、其心を凝し、其の情を一つにし、其守りを固め、其の操を寄せ、從順柔和に全身を献ずるほどの目的を得たいと云ふが、女の特色である。男には生れつき、ちと放埒の所があるが、女には自然、愼しみ深い凝り性の所がある。

◎故に、女は取分け、信仰にあつい人物で、懷疑は其の極めて適せぬ所である。感激、身を致し、献牲奉公の心持で、骨を粉にして働らくと云ふとが出來れば、中心に甚はだ愉快なのである。斯樣な心に落付けば宛がら吾家に歸つたようなもので、此心から遠ざかれば、丁度他人の家に行つて泊つた

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

よふなものである。男は他所に泊つてもグウ〳〵寝るが、女は兎角、外泊に慣れぬ。女が其の安住安心の決着から離れて、餘處外の所に一泊して居る心持は、中々男子の想像することの出來ぬ所である。女子の懐疑は一入痛ましいことである。

◎男子も懐疑々々と云つたことが二三年前はあつた。然し隨分氣樂な人が多くて、懐疑々々と言ひ乍ら安閑と凝滯の出來た方である。中には熱烈にして遂に自殺するに至つたものも幾分かはあるが、先づ西洋の肉食者の懐疑に比べて見ると、何となく、草食的で、淡泊で、スキ通つて、洒落であつた。然し女性一と度び懐疑の界に入れば到底此位の事では濟まぬ。思ひ返しの付かぬが女の常とも云つて、只だ一圖一徹に思ひ込み、殆んど狂する如くになり、愚痴此上なき狀態までに落入る、甚はだ憫然なるものである。而して、其の元因の第一は、主として信仰を失ふと云ふ所から起るのである。人に於ける信仰、世に於ける信仰、神佛及び道理に於ける信仰を失ふからして遂に此に至るのである。

◎然し、情に熱するものは、亦た情に脆いもので、ポロリと折れて、一夕に悟ることも亦た早いものである。男子の悟りは寧ろ理から這入つて、空理に拘はることなどもあるが、女子のは、人に關係し、實際の生命に關係せぬと中々覺れぬものである。即はち、理論を以て導びくべからす、熱誠を以て導びくべし、哲學を以て案内すべからず、愛情を以て手引せねば成らぬ。万語千言を重ねて、何の効もなく、細微玄妙の究理を盡しても亦何の甲斐なきものが、只だ心花情香の一片一掬で、豁然として悟ることがある。

◎古風の女性は、其の夫とする所、其道とする所、其家とする所に、千古の定規を當はめられ、万代動かす可らざる鐵案を下されて、身動きのならぬほどに確信し、只だ其の理想に近づかんことをのみ力めたるが、今の女子其の所學に新らしき解釋と例證とを示され、周圍の風俗と、世上の要求との變化せしによつて、殆んど行途を見失ひ、如何にせんかと躊躇するうちに、事々物々吾一身の事實問題となりて迫り來り、吾が情懷を滿足する途はなくして、吾を罵詈する器關は悉とく備はり、祝福未だ來らずして、咒咀先づ到り、天人ともに吾を苦しむるかと疑はる。懐疑の念起らざるを得ざることであらふ。吾人は深く同情を表するのである。

◎然し乍ら、學問の學問たる所は、一時の假相に惑はずして千古の大道を辨じ、人情の幻相に迷はずして、其の根本の基礎に確信することにある。懐疑は只だ道行にして、堂奥にあらず、もし眞とに疑はゞ則はち開悟の機こゝに生ずることで、所謂ゆる大疑大悟を生ずるのである。吾人は決して女性の懐疑を奇しまぬ。只だ疑はゞ眞面目に疑がつて而して速かに開悟の因縁を求めらるゝが宜しい、世上夫々其の方便が備わつて居るのである。懐疑をオモチヤにして、中途で道草を食ひ、只だブラ〳〵として贅澤な懐疑論を吐くは、眞の懐疑でもなければ、亦た開悟の道も通ぜぬのである。世上もし眞に懐疑熱切の女子あらば、吾人は之に滿腹の同情をよせて、其の開悟の因縁の一つとなることに用意して居るものである。蓋し、此より出でゝ翻然として新信を得、其の感激に熱し、其の獻牲に決心した婦人でなければ、新日本新女學の先覺とはなれぬことであらふと信じて居る。

入二吾室一者只有二清風一　他日入レ山定不レ為二生客一。

公娼の新設、公娼の寛假

◎公娼は全廢せねば成らぬ、妓樓は撲滅せねば成らぬ。之は男子の爲めに救ひであるのみならず、女子の爲め慈悲である。之あるが爲に、淸潔なる男子も誘惑せられて墮落する。之あるが爲めに純白なる女子も身を賣つて操を破ぶる。之あるが爲に、家を破ぶり、伉儷を破ぶり、貞節を破り、風俗を破ぶる。之あるが爲めの利益とは抑も何事である乎。

◎世には汚はしき情慾の爲に此を設置せよと云ふものがあるが、左樣のものゝ爲めにワザ〳〵公けに設置準備する必要はない。左なくとも、皆なカクレ〳〵に罪惡を犯すことで、彼等は其の密惡密罪の所に制裁す可きである。之を公許して彌よ其罪惡の區域を擴めると云ふは、官上公衆などの斷じて許す可らざることである。

◎今の公娼設置論者は、いろ〳〵の名目を冠つて議論するよふなものゝ、ツマリは地所の直段を上よふと云ふに過ないのである。遊廓で繁昌させ、景氣をつけやうと云ふ。凡そ土地を繁昌させる經濟策が此位の見識であるとは、眞に苦々しい

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

とである。斯る附景氣と、悪性の繁昌とで、土地が永久に富むよふに思ふて居るとは、何たる不見識の事であらうか。其不道徳を歎くは扨措、先其愚なるとを歎かねば成ぬ。

◎公娼あり妓楼ある時は、立派なる婦女子が之に身を投ずるよふになる。之が如何にも悲しきとである。親の爲め、夫の爲に身を賣つて苦界に沈むものが随分ある。其の孝心貞心を聞けば、女郎と一概に言つても、實は憫然至極なもので、遊廓を悪むの情が大いに減ずる。火を以て之を焼き盡すべしと迄でに思ふべき妓楼の中に、親を思ひ夫を思ふ可憐の婦女子があるかと思ふときは、甚はだしく公娼を悪むの情を減じる。之れ實に第一の遺憾である。之ほど迄でに、立派の婦女子をして身を落さしむるは、公娼となつて公けに認可せられ、世人も大いに之を寛假するの致す所である。純白なる婦女子をして其身を汚がさしむるは、公衆が之れを認定して居るからで、ツマリは公衆が其の女徳を破らしむるようなものである。公娼は單純に悪むべく忌むべきものとなさねば成らぬ。其中にかせぐものは、毫しも可憐の情を與ふるの價値なきものとなさねば成らぬ。之が即はち大いなる慈悲である。

家　庭

俄出世の家庭

賣家と唐様で書く三代目は父祖の蓄財を皆な使ひ切り家庫は夙く書き入れたれば賣つても手に殘る金は少なく勝手に賣直段を高くして架空に殘金を胸算し未だ這入らぬ金を心當てに更に縱よ使ひ二進三進の勘定のつかぬ日に七所八所に借り廻り遂に瓦解出奔の外なく巍然たる高楼も夕日影に沈み嚴然たる高土塀も追々崩れ掛り只痩せたる犬の出入に任す三代相續の由緒は夢物語にのこり人生の榮華覺めて跡なく實に淺ましき名殘をのみ止むるは御一新の前後に聞く所なりしが悲運巡廻して今また其の模樣なきにしもあらず浮かとすれば忽まち其の覆轍を履まんとすると眼前に其兆し歴々たり人々決して油斷すべからざる也凡そ人の苦心は三代にして而して後ち煥發するを當然とし才は此に至つて天才となり富は此に至つて名家となり徳は此に至て餘慶あるとなるに風雲際會の好機會

に一躍し俄に出世して天下に知らるゝ一代成り上りのものは其の手腕其の胆力もとより凡ならぬは勿論ながら其進路に於て必らずや無理あり元來徐々として自然の歩みを履みたるならねば其痕跡ギラ〳〵として人に目立つ代りには是非とも人を傷つけたるとなくんばあらず其の怨みは何等かの形ちをもて報ひ來るものと覺悟せざる可らず古しへ豐太閤の天稟をもてするも二代とつゞかず秦始皇の豪傑すら家を長くすると能はざりき其他の輩に於ては前途固より明白にはあらずや左れば俄出世の人は天理の嚴そかにして人情の僥倖なき所以を篤と覺悟し身は本と一時の機運に乘じて此の幸福を得たるものゆゑ恩は時勢にあり我力の致す所にあらずと承知して深く謙遜の心得なかる可らず機運の與へたるものは機運亦た之を奪はん天は決して造化を私するとを許さずと知つて我より克己抑損の修練を積まば人運久しく盡きずして長久に報酬あらん曾て成田不動の經濟を聞くに日々の收入驚ろく程なり左れば其の支出も亦莫大なるが昔より之に言ひ傳あり不動明王は錢の溜まるを嫌はせ玉ひ入りたる丈けは散ぜよとの仰せなりと言ふ先代の坊主之を可かず今時かゝる愚說を信ずべきにあらずとて大いに改革を施し嚴しく節約したるに其頃より收入パタと止まり其の節約せし丈けの出費にすら不足を告ぐるに至りしかば今代に於ては復び前例に返しドン〳〵其の支出を惜しまざりしに不思議なるは亦た之より前々の隆盛を得たりとなり人之を不動明王の威嚴あらたかなる所以と言ふ實に天道のあらたかなる所以と解釋すべし之を一家の經濟に喩へて其の暴りに支出するが宜しと云ふにあらざるは論を待たざるとなるが吾手に入りたるものは即はち吾ものと思ひ僻がむるが誤謬の第一と悟り天運時世我に幸ひして人なみ以上の收入を與へ玉ふの時は我亦た之を人の爲に使用せざる可らざるものと覺悟すべきが此の場合の要道なり左れば吾家の富大いに增すとも其の總べてが吾ものなりと思ふ可らず吾地位大いに高まりたりとも其の價値吾に存すと思ふ可らず其の幾部分は吾以外の勢力の致す所と承知して之を清く散じ公に與ふるの覺悟なかる可らず左あるときは驕りの心自づから減じて謙り奢りの心自から抑へられて儉やかとなる家風之に熟し兒孫之に慣るゝをもて家庭の基礎盤石の如く其の家久しきに續くを得るなり古しへより國も家も其起るや一其亡ぶるや亦一絶

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

えて遊ぶとなし即はち克己謙遜にして儉素を尊むより起り怠惰強慢にして奢りに荒ぶより亡ぶ其揆一なる設假りに西洋を見よ自から文明と稱えて驕り生計大いに進み自國の商賈丈けにて維持しがたきに至れり即はち無理に東洋に出張り居ば未開化國を苦しむるの所以なり吾們は惟ふ西洋の衰運之より兆すと昔グリーキ羅馬などの亡びしも皆な此の故にて自から文明とせし奢りの結果なり露士亞は野蠻らしく支那は儉約にて彼等之より崛起せんとす其の自から足らずとする故に即はち足されば自今大に進まんとす二十世紀の大立物は必らずや露士亞と支那とならんなり我國の如き文明々々と人眞似して文明の餘澤何ほどぞや眞の文明とは決して左樣の淺墓なるものにはあらず文明によつて國貧しくなり文明によつて家の衰へたる例據多かるべし今や少こしく目を覺まして可なり左れば家を起し家を續け其基礎を堅固にせんとするものは一刻と雖ども得意驕慢の油斷ある可らず油斷すれば必らず破る假令ひ月千圓の生計に困らぬ人なりとも苦勞して立身したる親が千圓の生計に慣れたる其子は二千圓を使ふに至り其子は亦た四千圓を使ふに至らん家亡びずして如何んせんや之を救ふは抑損にあり最早之ほどの樂はしてもと思ふ安心を二つに割りて兒孫の心上に謹嚴なる訓戒を施こすべし今惟ふに御一新以后に成り上りたる假出世の人少なしとせず或は紳商と云ひ或は勳爵と云ふ大抵は一時の風雲に僥倖して格外の立身したり之を我力と思ひて翩翻得意の狀憫れむべき姿なりしが其の惡結果は已に既に晩年に報い今早や氣の毒なる零落に歸せしものあり將に歸せんとする向もある也況してや其の兒孫の世となりては大槪ね失敗のみ指を屈して明治以後立身の人の家を算するに悲しき末期に臨まんとするもの滔々たり夫れ誰か之を救はん唯だ早く自から覺醒して速かに挽回の工夫を盡すべき也人或は三菱家を指ざして假出世の必らずしも薄弱ならぬとを証せんとす夫れ或ひは例外ならん否な自から抑損して富を子分に分ち或ひは大に散じ以て基礎を造られたるの致す所か余輩未だ精く知らず然し乍ら其の居室の宏大にして其持株の無數なるによつて直ちに之を堅固なりとするは白人考へたるを失はず假りに一例を擧んに德川氏千代田城に居を構へて嚴然たり大將軍の株を握ると二百六十年誰か一朝にして其の倒るゝことを知らんや然るに一旦機轉じて大勢足下より覆へれば

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

此の千代田城は半日にして明け渡し征夷大將軍、淳和奬學兩院別當源氏長者の持株は紙一枚の書附にて奉還せしならずや今ま岩崎家の居城宏大なりとも江戸城には及ばず其株多くとも徳川氏の株には敵はざるべし然るに之を以て大丈夫なりとする所以は何にありや少とし疑ひなき能はず左れば人々世をいつ迄も太平と思ふ可らず太平太平と謳歌する人の多き程亂は知らざる間に來るもの也況んや逆境目前に現然として機勢一轉の日近からんとするに今尚ほ長夜の夢を覺まさゝるは何事ぞ吾は人々の直ちにケチン坊となるを勸むるにあらず別に大いに修養覺悟する所あらんことを勸むる也もし讀者此の文によりて單に卑吝の心を起さば玆に一例を擧げて結末とせん曾て某處に寺院ありて大なる賽錢箱を置けり賽錢の入り巨多なりき一日其の底を調べたるに何ぞ斗らん少小の穴ありて竊かに椽の下より其幾分を盗むものありし也坊主喫驚し急に此の穴を塞ぎたるに賽錢の入更に増せり然るに何事ぞ數日の後一夜火を失し伽藍忽然烏有に歸せりと。嗚呼節約の道豈に他あらんやたゞ已にある耳。

三代目

鷗村

凡そ新に興りたる家は、其三代目に至りて、大方、存亡の決せらるゝものなり。夫れ、新家は多くして、舊家は稀に、已れ一代にして亡ぶもあれば、二代目にして破るもあり、就中、三代目に至りて斷絶するもの、最も多し、然るに三代目に至りて、家道益々堅固なるが如きものは、多くは、子孫の末長く榮ゆるものなり。

三代目が、家道守成の大難關たるにつきては、大に考ふべき所因あるものなり。凡そ新に一家を興すなる創業の主人は、もし彼れ、商賈ならば、身、赤貧にして起ち、千艱萬難に耐へつゝ、日夜、額に汗して、孜々營々として、秋毫も利を忘れず、衣食を節し、かくて、一厘一毛を積んで、巨萬の富を重ぬるものなり。古への武人が、其初め家聲を隆めたるものの實歷したる處も、其辛苦困難の大なると、彼の商賈に優るとあるも劣るとなく、而も商賈は專ら利を獲て成り、武人は專ら徳を積んで起るものなれば、更に一層の困難を舐めずんばあらず。家は實に創業者が苦心慘憺の結果に興隆するも

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

のにして、其大なるを致すものなるに從つて、彼の苦心はいよ〳〵大ならずんばあらず。

初代の主は、しかく十數年、若しくは數十年に亘り、殆ど一生の苦心を假して、漸く一家を成就するものなれば、また自ら忽ち之を破滅せしめんとは、甚だ殘念に思ふべければ、勝ちて兜の緒を〆むる心掛けにて、なか〳〵氣を安めて、息をつく間も無く碌々甘き物も食はずに、二代目に跡を譲りて、身は本の木阿彌となりて、墓場に入るなり。もし夫れ假に出世して、我れ一代の間に、これ見よがしと驕奢を極むるものは、二代目に借金の、言譯に困らす程の仕合を殘して死して、死際に、今迄の友人にも仇敵にも、寄つてたかられて、家も藏もたゝき潰されるよ少からず、如此きは、家といふ家の中にての、最も脆きものなり。

創業の主が、先づ無難にて、己が苦心の末の家を、二代目に譲り渡したる後、其二代目といふには、初代が創業の初端よりの苦心を實見し、己れも粥を啜りて育ちしが、多きものなれば、あたら、先人の苦心を水の泡となすに忍びざるのみならず、また興家の術法を、いつとはなしに覺え込み居れば、先づ安穏に家道を守成するとを得べし。然るに既に三代目となれば、彼等は、生れ落つるより、坊樣、若樣と持て囃されて、子に甘き親の情より、二代目に安樂に育て上げられて、金錢は自然に湧き出づるものと覺え、家來は、我が無理を聞いて自由に奔走するものと心得、長ずるに從つて贅澤を極め込みて、毫も祖父の苦心を解するの遑あらず、處世の難きをだに悟らずして、折角の家を繼ぐもの多ければ、其家久しからずして亡びざらんとするも得んや。藝が身を助くる程の不仕合となりて、紙衣着て破れ屋をたゝき、唐様で賣家札書く仕宜となるなり。鼻紙びゝんびと遊ふものは曲者ちやと近松はいひけるが、さる曲者は、多くは三代目に出づ。初代が、格別の不義理をせずに興したる家なりとも、三代目の馬鹿息子に至りて滅亡するもの多きに、もしこれまして人を苦しめ、他を悩まして興したる家ならんには、其時は、えたり賢と、待ちに待ちたる仇敵に打ち潰されざるはなし。

三代目にして、家の亡ぶるもの多き所以は他なし。創業者の遺産遺業あるを知りて、彼が苦心を知らざるが故なり。たゞに三代目といはず、もし子孫に遺すに、産業のみを以てして、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

之に伴ふ苦心を傳へずんば、其家遠からずして、必らずや亡ぶべし。子孫が、家道の饒かなるに誇りて、驕奢に長ずるとあらんか、其家は即ち末路に瀕するを知る。創業者自からとても、身やうやく安くして、創業の苦心を忘れ、奢侈に過ぐるとあらば、折角の新家は即ち危きを招き、二代目も、もし初代の苦心を知らずして、家を繼がば、其家即ち亡びなんとす。二代目にして、家を亡ぼすものは、多くは、初代が成業の後に生れて安樂に育てられたる子弟なり。武田氏豐臣氏の二代にして亡びたるが如きは、即ちこれなり。紀國屋文左衛門の息子が、幼時多くの小判に穴を穿ち、之に糸を通して、玩弄物となせるをば、或人之を見て、此富家、この息子の代に至りて亡ぶべしと云ひたるに、果して、其如くなりしといふ話もあり、これも二代にして亡びたる例なり。其他此類世には甚だ多けれども、先づ、家の亡ぶるは三代目を以て多しとなし、而して彼も此も、其道理は同じきものなり。概するに創業の苦心の傳はらざるに至るの境は大方三代目に在るなれば、故に家は三代目を繼ぐを、最も難しとなす。三代目が、首尾よく家道を破るとなくんば、最早此時には、其家の家法も立ちて、根據やうやく堅くして容易に拔き難きを致すべく、此に守成の業の半ばを成就するとなるべし。凡そ長く續きて榮えたる家には、其三代目に、必ず、英邁なる人物の在るが如くに思はる。源氏が關東に威力の根據を据ゑしは、頼信を以て、其祖となすべし、而して其三代には義家あり、北條氏の三代には、泰時あり、徳川氏の三代には家光あり、此等は、武將の例なるが、なほ又農商の舊家に就きても、同樣に、多くは其三代に卓越せる人物ありしなるべきを信ず。

それ二代目はなほ創業の中に在りて、之を家屋に譬ふれば、新築の跡片付の如し。まことに新家に落付いて住居する如き、守成の業は、多く三代目を以て始まるものと見て差支なし。守成の難きとは創業に讓らず、共に同一樣の苦心經營を要す。然るにたゞ安閑として、奢侈放逸に長じて、三代目の守成に當る、其家何ぞ破れずしてあるべけんや。

百年の謀は徳を植うるに在り

亭主の威光

ちやうてい

虎の威を假る狐、主人の門先に吠ゆる痩犬、親の名聞に威張る馬鹿息子、阿呆娘、君の威權に驕る不忠義者などは、古へより諺に云ひ、譬に引きて、甚だ賤しむべく、惜むべきものとせられたり。然るに此頃は又、此等に加へて、亭主の威光を笠に着て、エラサウ顏する女房のメッキリと殖えたるとかな。

御一新このかた女權擴張といふ呼聲、次第に高くなり、各種の婦人會の一起一亡しつゝ、自然には其數を增加し來りて、これには、會長とか、贊成員とか、特別會員とか名つけられて、上に立つ婦人輩ありて、彼等の大多數は爵位持ち財産持ちの亭主に從ふ女房連にして、規則書にも主意書にも大形の活字にて、何爵夫人、正從何位夫人と書きしるされて、集會の席には、ヤンヤと持ち囃されて、自身にも大風に氣取り、金銀、ダイヤモンドの燦爛たる光彩にて、衆人を睥睨して、上坐を占めて、これ見よがしと威張るものなり。國家社會に功勞ある男子の人爵は、なほ尊敬すべしと雖も、これは亭主といふ人爵を受けて、本來は無學無能にても、賣女上りでも、何々夫人といへば、亭主同樣に幅の利くものと思へるものなれば、小面憎きといはん方なし。人爵は天爵に伴つてこそ、始めて尊きものなるに、これはたゞ亭主の威光によりて、事々に人爵を誇る。亭主の地位故に、賜はりたるものならば、尊き寶冠章も、焉んぞ身の光りとはなるべき。

神輿は、元來賽錢を儲ける人に擔がれるやうに出來たるものなり。これと等しく、無能無智なる人間にて、多少地位あるものは、いつも野心家、策士等に擔ぎまはされて、彼等が利益の種となつて、自身も嬉しがる。彼亭主の威光を笠に着る女房等も、また此類にて、會長とか、特別會員とか、いはれて、何々夫人といはれて擔がれるとが、結句嬉しくて、それが爲に、亭主の懐より人並以外の金錢を引出して、得意がるは、千萬、苦々しき次第なり。擔ぎ廻されて、東に西に馬車に車に驅け廻りて、社會に盡くすと斯如しと、我はと思へども、同時に、家の事は、おろそかになり、亭主の借金

を、我も手傳ふて殖やし、五兩一分の高利の金を借りてでも身に箔を飾りて、人の囃すに、有頂天となるものも多く、又襤褸着た昔を打忘れて、亭主の立身に、我も立身した氣になりて、鼻高々と、人前に贅を極めるもあり。中には、いゝおつき奉公人共が、家事万端引受けて世話するあれば、苟も高位高官の亭主に添ふ奥樣たる我が、臺所に還ひ廻るは、勿躰なしと自重して、我こそ亭主を助けて、朝化粧夕身仕度の暇を以て、公に奉ずれば、しか〳〵の功益ありて、他人また尊敬を盡くすべしと、妙に悟入するものもあれども、こは畢竟、金や力を求むる方便に使はれるものとなるに過ぎずして、使ふものは彼等の欲望の急所を衝いて、他を悦ばせ、自ら利す。されど其實は、うるさき厄介物なりと思へども、さし當り、致方なき道具として彼等を使ふものなり。

己れは、地位ある亭主に添ひ得たるとを以て、勇士が、敵の大將の首を獲たる程の名譽に比して得意なるべけれども、其手柄顏こそ、甚だ賤しけれ。常に玉の輿に乘りたるを誇るが故に、名詮自稱の擒がれ者となるなり。女房の地位は、亭主の地位に寄生するものなるに、之に誇るは、寄生木が、丈の高きを誇るが如し。亭主の威光は、アルミの如し、アルミ一旦剣落せば、乍ち地金の眞鍮、鉛となる。亭主が榮華の夢さめて乞食となるとあらば、自からもまた乞食とならざるべからず。亭主の富貴に誇るが如き女房は、家の末路逆境に臨んでは、火の車を廻し兼ねて、怨恨怒號して、亭主の厄介此上なき者となり、而して富貴なるに當りて、百年の家計を立てざりし罪は、専ら其身の上に在るとを忘るゝものなり。亭主の威光の笠は破れ易きものなるを覺らず、之を繕ひて、保全するの計をなさず、却て自ら之に着通しにして、早く之を破らんとする女房の無智は、哀れといふも愚ならずや。かゝる誤の當世に多きこそ悲しけれ。

支那人の家政

一概に支那人をケチのように言ふは眞相を誤まりたる觀察なり。成程彼等の倹約は驚ろくほどにて、所詮日本人の想像にあらず。臺灣にて申さば中等の格式にて、一日一人五錢あらば生計費は足るべし。沓は穿かずして素足なり、衣服は年中

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

同じものなり。朝より夜に入る迄で、器械の廻る如く奔走運動し、休む時とてなし。而して、立ン坊すら一日七八十錢以上一圓二三十錢を取るとゆゑ、平均一日に一圓、月に三十圓、年三百六十圓の貯蓄はなす。宜べなり、彼等立ン坊すら、三千四千の銀貨を貯蓄するものの比々として多きとや。斯様に貯蓄して放さゝると、スッポンの一度食いつきて離さざる如きを見て、彼等は只だ一圓に溜める計りと思ふ可らず。支那の金もちは大金もちにて、一寸と小質を取る家にては百萬兩以上ありと云ふほどなれば、十萬二十萬にて金もちとは言はず。また上に上が多くあるゆゑ、比較的に貧乏と思ひて、少しも油斷せず勉強するとなり。其代りいよ〳〵大丈夫の身代となり、先づ其地方の紳士と云はるる身分となれば、驕奢大槪驚ろくほどにて、殊に晝夜管絃の聲を絶たずと云ふ狀態なり。左れば、支那人の金に約やかなるは其のケチなるにあらずして、望みの大きなるなり。望み一と度び達すれば、迚も日本人の如くケチ〳〵したものにはあらず。但だ用心堅固、經濟手丈夫なれば、一年や二年の收入が增したりとて夫にて生計を高くするなどの浮かれものにはあらず。是非、基本の財產となりて、其の上り高の確固なるもの出來ぬうちは、收入と見做すとなし。即ち是れ、其の溜め方の精まやかにして、容易に奢るとなき所以なり。之は我國の俄出世の族が、一月二月のまうけにて直ちに格式を暴騰させるなどの比にはあらず。其抱負の遠大にして、其の謹愼の堅固なると感ずるに係りあり。之は是れ戰亂になれ、逆境にもなれ、政治の保護行き届かざる所より、自然に堅固なる家政を工夫せしものと見へたり。殊に浦山しきとと云ふべし。大連の臺北などは、日本政府となりてより俄かに繁昌し、支那人の手に落つる金は三四倍になりしに係らず、彼等が生計は依然として元の如く、決して奢りを增さず、油斷するともなし。彼等は日本人が狂舞する傍らに、冷然として前の如く勤勉し、一時の景氣によつて少しも生計を變ゆるとなし。之は日本の開港場などにて迚も見がたき所ろなん。少しにても收入が殖えれば直ちに生活を高くすると云ふ日本人が淺墓なるに比べては、彼等の用心は雲泥の差なり。然るに、彼等は斯の如く節約すると同時に恐ろしき太ッ腹にて、出すべきとに毫も惜むとなし。彼等の眼中に日本の紳商は如何に映ずらん。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

夫婦反離の摸様

連理の交はり比翼の睦び同穴偕老の契りこそ世に夫となり妻となりたる人の榮えなれ。然るに何んぞや伉儷にして讐敵の如く、犬も食はぬ喧嘩をして近所近邊に騷々しき名を流す、浮名の忌はしきよりか尙ほ忌はしと云ふべし。然るに、反離の摸様、男女によりて形を異にするとあり。試みに其の相違を比較して一興とせんに、何れも其の面白からぬものに就て立言すると知るべし。素より面白き連中にて夫婦仲の悪しきは先づ稀なりと見ざる可らざれば也。玆に其の比較を言へば、男は金が出來れば妻を忘れて外に樂しみを作る。女は、金が無くなれば一生懸命となりて家の回復を計る。其の代り、女は、男の意氣地なきを嫌ひ、いよ／＼末の見込なしと見るときは逃げ出すとあり、男は、女の意氣地なきほど之を憫れみ反つて一種の情愛を増すとあり。左れば、家富みて夫婦離反するときは、夫が悪しきなり。家貧しくなりて夫婦離反するときは、妻が悪しきなり。女意氣地なくして棄つるは男の悪しきなり。男意氣地なくして女の離縁を乞ふは、少しは恕せざる可らず、何んとなれば、之れ殆んど通例の女の常情なれば也。此によりて觀ずるに、男は其の得意安心の故に過ちを爲す。女は元とシマリ好く、見据を第一とするゆゑ、必らずしも現在の貧乏にて氣を落すとなけれど、行末覺束なきときは最早斷念す、其折の冷淡なるは恰かも情なきが如し。離縁しても錢を落せし如く感ずるは男なり。離縁の後ちに思ひ切りのよきは女なり。たゞもし子と云ふカスガヒのあらば、女は宛ら痴人の如し、分別も、決心も、皆な此によりて鈍ぶれど、假令ば石婦にして子なきか、子あるとも既に獨立して手元になき場合などには、思ひ切りのよきと女ほど淺ましきはなし。故に、男は其の得意の時に於て妻につらく、女は其の見込なき時に於て夫につらし。双方ともに賞めた話しにあらず。生れて伉儷となり、万代長久のかたらひを爲すべきものが、斯るとにて相別れては如何にも歎かはしき限りなれと、先づ／＼普通々俗の族は即はち斯の如しと知つて、常に自他の戒めとなさんと肝要なり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

史傳

西樂餘韻

有美

〔雜錄『樂界の秋色』參照〕

◎ショッパン

樂の妙味は、よそ人の得知らぬところにかくれて、黄金の鍵もてるベートルならでは、之を開くことの難き、なほ天國の門にもまさりぬべしと、諺にいふ似非名人の僻れさよ。かの波蘭の樂人が、我が邦人の好みには、よく適ふべしといへるショッパンの、父と共に生國ローレイヌを餘所にして、同く亡國の恨みを宿すなるポーランドに住ひける頃、これは或る夜のことなりき、かねて父が陸軍の教授なるにまかせて、その家に賴みおかれたる貴族の子供たち、如何にしけん、師の君の在さずと見てか、荒れ廻りかけづり叫びて、噪しさ忍ぶべうもあらず。さればとて之を靜むるほどのもの、仲々にあらざりける。こゝにフランツワ、フレデリクと呼ばれたる我が稚きショッパンは、如何なる名策を小さき胸に蓄へてか其猛り猛ふ小供達の前に、つか／＼と出で來り『若しこれよりして、かゝる騷々しき擧動悉くやむべしとならば、いざ、面白き物語をピアノの調べに合はせて、歌ひ聽かさん』といへば、それうれしやと小供等みな鳴りを止めにき。ショッパン即ち身を起して傍なる樂器の許に座り、先づ何よりもと燈を吹き消し、聲も妙へに歌談りせるは、昔、さる所に餘り肝太からぬ盜賊のありけるが、一夜ある家の窓を破て忍び入り、二階に上らんものと梯子側まで近づきしに、ふと何れよりか物音の響くに怖れ、急ぎいでゝ夜の暗きに其身を紛らし、逃げのびて叢茂きさる野邊にいたり、袖を枕に冷き夢を結びけるとの筋なりしが、話の進むまゝにピヤノの曲調は愈々佳境に入り、一ト調べは一ト調べより妙へになりもてゆき、その盜賊が燗く星にわが身を照らし、遂に眠りに入れりとのくだりに至れる頃には、聽くもの恍惚陶然殆んど醉へるが如く、かの罪なき守歌を耳にしてすや／＼とやすむ赤子の如く、何時の間にか、そこに居並ぶものども皆な前後

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

も覺らぬまでに、深く寝入りければ若き樂人も己が調べの不可思議なる功德に、稍々驚きしが、そのまゝ室をぬけ出で、兄妹母など凡て家人の集ひ居るところに來たり「しばし燈取りて我が後に隨ひ來よと」いへば、何事の起りしぞと皆な彼の室に至り見るに、一面の白河夜船を漕ぐものゝみなれば、またく驚かぬはなかりし。玆に稚きショッパンは再び身をピヤノの許に寄せて、此度は耳も裂けよと快活なる一曲を彈ぜしに、また不思議や、眠れるもの共一切に、何物にか驚かされたるが如き面持して、俄に起き上りこれまで何事の起りしとも知らず、ひたすら、とぼけ顔なるに、觀る者一同思はず興に入りて打ち笑ひをかしきことに思ひけるかゝればこそ、音樂の功德も大なるものとは讚すべけれ。さるを、我が調べる人の動かぬは、その聽くひとの素人なればとあなづり嘲て自ら顧ること薄きは、さても愚の極みならずや。人をして泣かしむるも笑はしむるも、皆な樂人の手中にあるものぞ。古き希臘の物語に、サイレンと稱ふる魔女あり。人一たび其住家を通り過て不幸にもそが歌を耳にすれば、そこに立ち止りたるまゝで遂に死するに非ずば去る能はずぞ。かゝる怪き昔譚の消え行くと共に、今の世にサイレンのなきぞ、こよなく悲しけれ。

◎バッハ

英吉利文學のチョウサーとも見るべき、獨逸の國樂を起すに力ありしヨハン、ゼバステ井ヤン、バッハも幼きより樂を好めるものなり。未だ十歳ならざるに兩親を失ひければ、その兄なる人の許に養はれける。この人オルガン彈者の名を與ひながら、かゝる商賈の利益うすきに懲りてか、弟の樂事に勵むを、憂きことに思ひなし、しきりに之を止めて他のことに就かしめんとあせれど、少も聽く色だに見えざれば、遂に甚く怒りて、音樂を學ばんためには、燈を與へずと、言葉嚴に之を實行しき。されど、我が稚きバッハはかゝる妨げにも志を奪はれず、螢の光窓の雪ならねど、月の輝く光に好める樂誌を讀み味ひ、之を寫し取りては樂みけるに兄益々怒りて若き樂人が心を込めたる寫本さへ、無殘にも取りあげて之を火中に投じたり。さはあれ、其志は益々堅く愈々斯道に勉めければ、後遂に一家をなすに至れるなり。大凡そ一事

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に達せんものは、何ごとも此る苦心なくてはかなふまじ、これにも倦きかれにも倦き、別に人すぐれたる技能もあらねば、まづは音樂にても試んかなどの、淺薄なる心掛けにては、其堂に入る能はざるも素より無理なけれ。蓄音器と生人形の如き樂人は、我等に用なきものぞ。

◎モツアート

酒の味ひ知らぬ下戸の輩は、ボルドウの葡萄酒もボルトウの酒も、ともに等しきものなりと思へど、是はその舌の鈍きためなり。モツアートとベートーフエンの異れるは、なほシエークスピヤとバイロンの離れたるが如しといふべし。之を畫工に取れば、モツアートは頗るラフアエルに似て、いふべからざる典麗雅趣を備へ、ことには調和均齊を重じて無理少きなど、まことに樂界の沙翁とも見るべし。されど沙翁の『リーヤ王』『ハムレツト皇子』などの、今や場に上ること少きが如く、モツアートの歌劇も、近頃西の國々にては之を演ずるもの稀なりとのことなり。こは、之を巧にこなし得る歌人のなきにもよるべけれど、俗受のよろしからぬに基すとかや。

悲しむべきことなり。されど、これによりてこそ作曲の輕重を定めんとするは、愚かしきわざなるべけれ。かのプラトウ、アリストートルの著作など、素より俗受けのよろしきものにあらず。しかはあれど、殘りて今日に至り、篤志あるもの丶ために、靈妙の光彩を發揮す。モツアートの曲、亦此の如し。まことに敬虔の心を以て、學者之を器にうつし、之を聲に合はせば、必ずや、神來その間に湧かん。彼れは亡ぶべきものに非ず、日々に新たにして又日々に新たなるものなれ。茲におかしきは、か丶る樂の名家の何れも早熟にして感激の心尋常ならざることなり。メンデルソンは、英國より故國に歸りて妹の死を聞くや、悲歎禁ぜず忽ち地に倒て遂に再び起たざりしと。又何處より來りけん、一日見知らぬ人の、モツアートが許を訪ひ、一回向歌を作りてよと賴みければ、こは、陰府より己が死期の近くを知らしめんとて、使はされたる使人ならめど頗る怖れ戚ひけるとぞ。樂家に欠くべからざるは、何物よりもこの感情の修養にあれば、心掛くべきことなり。されば或る評家の如きは、ベートーフエンの成効を以て、全くこの一事に歸せるも理りなれや。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎ベートーフェン

世には我がルドヴ井ツヒ、ファン、ベートーフェンを以てシエークスピヤに比するもの多けれど、こは誤りなるべし。沙翁の影は、寧ろ之をモッアートに見るべく、ベートーフェンは稍々大なる、ゲーテに似たりといはんかな。その燃ゆるが如き恐ろしき一種の實相に觸れて、しきりに之を傳へんと悶へたる如き、その彰はすところの、多く悲調沈痛なるに傾けるなど、皆な悶絶苦煩の結果ならぬはなけれ。佛人フオンサンが『聖なるモッアート、偉なるベートーフェン』をいへる語こそ、短しといへど面白きものなるらむ。ある木枯吹きすさぶ或る夕暮のことなりき、ボンの街を逍遙し歩めるに、怪やしき破屋のうちより、我がものせる『(へ)調ソナタ』の響き聞えければ、しばし立止りて耳傾けしに、ピヤノの音は間もなく消えて、この度は涙交りにコロヒチの樂會に參することを能はざるを恨むの聲聽えにき。これは優しき乙女子の聲なればと、戸押しあけてうち入れば、こは憐れなる靴師の家にて、顔姿やつれたる一人の少女あり、ブロンドの髪毛美はしく肩一面に振り亂し古く破れたる樂臺にもたれ、また側には兄なる人にてやあらん、忙はしく靴縫へるがありける。ふと見ればその乙女といふは哀れにも全くの盲ひにて、その奏せる樂はなほブルールに住ひける頃、隣りの貴女が日々彈ずるを窃に聽て耳覺りに覺りたるものなりとのことに、こゝに一段の哀れを催ふし、我れ卿等のために一曲を彈じぬべしと、靜にピヤノの前に座を占めて、指を始めのコードに染むれば、不思議や、こゝにも魔術の網は廣げられ、樂臺は妙絶痛絶の靈音を發し、兄はその忙げる靴を傍へにおきて之を聽き、妹は手を胸にあてゝささやかなる心臓の響きさへその靈音を亂すには非ずやとひたすら怖るもの丶如し。彈くもの、素より其身のあるを忘れて、神來の導くまゝに動くらめ。兎角する間に、一陣の軟風、何れよりか吹き入りてサッと燈を消し、月光煌として窓の間よりさし來り、樂臺のほとりを照らすこと切りなり、あゝこの夜は一天くまなくすみ渡れる月の夜なりしなり。樂人も之にうたれやしけん、手を休めて、頭を胸にもたれ、しきりに思ひに沈むのみなるもおかし。兄なる人之を氣の毒に思ひてや、「不思議の人よ」

と靜に獨語しつゝ『卿は誰よ』と聲高らかに問へば、『しばし』と答へて、音もあやに彈き出せるは前なる『（ヘ）調ソナタ』の序曲なりけり。こゝに魔術は破れ『嗚呼是れベートーフェンなりベートーフェンなり』と兄妹ともに立ち起り、うれしさあまりて殆んど狂せんものゝ如く、しきりにその手に接吻して、忝さ餘りて涕に咽びにき。この騷ぎに肝ひしがれ、いそぎ其家を出んとすれば『なほ一曲を』と袖を控てせまらるゝまゝに、情深き人の常とて亦捨て難き心になり、再び樂臺につけば、月愈々さやけくそが身を照らし、そのむくつけき毛髮と巨大なる軀形とは、あやしき光を放ちて、古きオリムパスのアポロ神を想はしむるほどなり。『いざや嫦娥のために、新曲を彈ぜむかな』と、しばしは心靜に天をながめて、星辰の宿りに眼をさらししが、忽ち指を鍵板の上に下ろせば、ゆるやかなる美音滔乎として流れ出で、その樣かの靜かなる月光の、徐ろに來りて地のこなたよりかなたに走るをも觀ずべし。かゝる間に調は稍々荒けく悽愴の氣味を帶び來りて、四分一音子を三つ宛ならべたるものとなり、月明に、戯るるおかしき妖精の、出でゝ青草きよき芝生の上に踊るかと疑はる。彈奏は最早や終に近けり。曲調愈々急激となり、沈痛また沈痛、悽愴又悽愴、飛ぶが如く、驅るが如く、聽くもの遂に悶絶驚歎せずんば止まず。こゝに唐突家を辭し、歸りて之を曲譜にうつせるもの、これぞ名高き『嫦娥之曲』なりけらし。あゝベートーフェンを以て感激の詩人といへるも理りなれや。之を光に譬ればモツアートは月の如く、ベートーフェンは慧星の如し。怪光その後に垂れて常形なく、まとに天界人界の奇觀なれ。而して彼又後遂に聾となる。悲哉。

◎メンデルゾン

これも又橋場の樂人が所謂邦人の好みに適すといふなるメンデルゾン、その名をフエリツクスとよべるは、天來なる樂聖の常とて才氣若く煥發し、僅に九歳にしてウオエルフルが者せる或る三部合奏のに演奏加はりてピヤノを樂會に彈じける。又モツチアーは八歳にして父と共に英吉利に渡りヂヨルヂ第三世陛下の前に出でゝ、非常の喝采を得何物にても出さるゝまでに、立處に新曲を工夫して彈奏し、作曲のことさへつとめて、名高き一曲を女王陛下のために獻ぜる程なり。十四歳

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

[illegible]して、當時歐洲第一と稱へられたるラ　スカラ組の管絃樂に合せ、己れは提琴を奏でつゝ、之が指揮を司れるなど、更に驚くべし。ベートーフエンは稍々早熟の傾少りしといへど、はや十一歳ならざるに、『パー、アン、チヤーヌ、アマター、ルイ、ウアン、ベエートーウエン(ルドヴ井ツヒ、フアン、ベートーフエンなる若き十歳の音樂者作)』てふをその表題にかゝげて樂に關する論議を公けにしけり。その說くところの正確明斷なる、いまの大人君子之を讀むも、得るところあるものなりとか。如何なれば、かくまで、樂人の年幼くして惠まるゝとよ。されど深く思へば、こは皆なその父なる人々の敎養よろしく、その性を血肉の間に傳へたるによる者ならんかな。

◎明治十年の時には、岩倉公から賴まれて、どふか行つて西鄕を說いて呉と云ふとであつた。全權ならば參りませうと言つたら、全權とはドゥいふとだと言ふから、夫は何をするか分りませんが、大久保や木戸を引込ませる位の事は是非しますと言つたら、夫は困ると云ふから、ソンナお使なら公卿でもお遣んなさいと言つて斷はつたのサ。佐野が證人だ、好く知つてるだらふヨ(海舟伯)。

文藝

扇の的　(平家物語)

那須與一

昔後北條氏の幕下に、佐野の城主にて、天德寺入道といへるは、或時臣下を會して、共に琵琶法師の平曲を聽きしに、中に就きても、最も武夫の哀れを催すべきを語れと命ぜしかば則ち宇治川先陣と那須の與一とを語る。入道感に堪へ得ず、流石の勇士も、落涙袖に餘りきとかや。

源平二氏の合戰は、本邦史中の最も悲慘なる舞臺にして、事件いづれも、演劇的なり。那須與一扇の的の條の如きは、語り物とし、所作物として、如何に好箇の一題目に非ずや。殊戰暫く休して、兩軍、陸と海とに退く處に、海には、美女、扇を船端に立て、陸には少年勇士之を射、兩軍堵觀す、豈に何等の好景ぞや。一塲の景、勇あり美あり、血あり、涙あり、吾人平家を讀んで、此章に至るや、案を打つて三誦せざる能はず。其文の流麗壯嚴、能く、其景を盡し、眞に篇中の壓巻なり、今其條を擧げて之が評釋を試みんとす。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

源平盛衰記の、此條を記する、叙事、綿密にして、文飾また勉めたるに比すれば、平家物語の文は簡にして素なりといふべし。されど却て情致深く、詩興に富む。平家は、もとこれ謡ふ爲のものなり、故に其文自ら曲調をなして、讀者の感情を催すと更に多し。

今日は日暮れぬ勝負を決すべからずとて、源平互に引き退く處に、沖より尋常に飾りたる小船一艘、汀へ向ひて漕ぎ寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横さまになす。あれは如何にと見る所に、船の中より、年の齢十八九ばかりなる女房の、柳の五衣に紅の袴きたるが、皆紅の扇の日出したるを、船のせがいに挾みたて、陸へ向ひてぞ招きける。

戰闘にして勝敗未だ決せざるに、日は暮れぬ。源軍互に引き退きて休らふに、沖なる平家の軍、一艘の小舟に美姫を載せて、陸近く寄せ來る。美姫の裝ひ、如何にとなれば、時は春の半のとなるに、折よくも似合ひたる柳の五衣に、紅の袴きたる、まとに春めきたり。立てたるものは何ぞ、全紅の地に白く日丸を抜き出したるものなり、戰闘の光景爲に尋常ならず。これ果して何の意ぞ。

判官後藤兵衛實基を召して、あれは如何にと宣へば、射よとにこそ候ふらめ。但し大將軍の矢面に進みて、傾城を御覽ぜられん所を、手垂にねらひて射落せとの謀にこそ存じ候へ、さりながら扇をば射させらるべくもや候らんと申しければ、

東北の武夫、みやびたる都男都女輩の、いままさに亡ぶべしと見えて、なほ此悠長事をなすの意を解し難し。

判官味方に射つべき仁は誰かあると問ひ給へば、手垂ども多く候ふ中に、下野の國の住人那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ小兵にては候へ共、手きゝて候ふと申す。判官證據があるか、さん候ふ、賭鳥などを爭ひて、三つに二つは、必ず射落し候ふと申しければ、判官、さらば、與一呼べとて召されけり。

場に臨んで、勇士現はる。

與一その比は未だ廿ばかりの男なり。褐に赤地の錦を以て、大領端袖いろひたる直垂に、萌黄縅の鎧きて、あし白の太刀を佩き、二十四指したる切斑の矢負ひ、薄切斑に鷹の羽割合せてぞ帯いたりける。ぬための鏑をぞさし添へたる。重籐の弓脇に挾み、甲をば脱ぎて高紐にかけ、判官の御前に畏る。

勇士出づ、其いでたちや壯、判官、必ずや此時早く、此男一定仕らんずと覺えたりけん。柳の五衣紅の袴に對するに褐、赤、檜皮色ないろひたる直垂、萌黄縅の鎧を以てす、彩色の配合は、作者の手段

判官いかに與一、あの扇の眞中射て、敵に見物させよかしと宣へば、與一仕るとも存じ候はず。是を射損ずるものならば、長き味方の御弓矢の疵にて候ふべし。一定仕らんずる仁に仰せつけらるべくもや候ふらんと申しければ。判官大に怒りて、今度鎌倉を立ちて西國へ向はんずる者共は、皆義經が

下知を背くべからず、それに少しも仔細を存ぜん人々は、是より疾く〳〵鎌倉へかへらるべしとぞ宣ひける。

三百餘騎の中にも、老巧の手垂どもあるに、分けて少壯にして撰に入りたる、名譽至極の恩命なりと雖も、一たびあやまらば全軍の大恥辱、これを何如ぞ、容易に諾すべけんや。これ實に勇士苦心の處。然れども判官は、一見して其技倆あるを知る、焉ぞ其辭言に聽かんや。

與一重ねて辭せば悪しかりなんやと思ひけん、左候はゞ外れんをば存じ候はず、御諚にて候へば、仕りてこそ見候はめとて、御前を罷り立ち、黒き馬の太く逞しきに、まろぼや磨りたる金覆輪の鞍置きて乘りたりけるが、弓取りなほし、手綱かきくりて、汀へ向ひてぞ歩ませける。

君父の命、辭し難し。勇士既に死を決す、運を皇天に委ねて、裝つくろひ、悠然として馬を進め、敵に向ふ。此處これ、眞に勇あり、涙あり、天德寺入道の感涙を禁ぜざりしも宜なるかな。

味方の兵ども、與一が後を遙に見送りて、此若者一定仕らんずると覺え候と申しければ、判官も賴もしげにぞ見給ひける。

死を決したるほど、勇ましく、恐しきものはなし。與一、死を決して君命に赴く、雄壯の後姿、人之を見て誰か感ぜざらんや。

矢比少し遠かりければ、海の中一段ばかり打ち入れたりけれども、猶扇のあはひは、七段ばかりもあらんとこそ見えたりけれ。比は二月十八日、酉の刻ばかりの事なるに、折節北風烈しく吹きければ、磯打つ浪も高かりけり。船はゆり上げ、ゆりすゑ漂へば、扇も串に定まらずひらめきたり。

其隔るや七八丁、尋常弓勢の及ぶべき處ならず、況んや風吹き浪荒れて、一事いよ〳〵難し。與一遂に一死を期するのみ。

沖には平家船を一面に並べて見物す、陸には源氏、轡を並べて之を見る。何れも〳〵晴れならずといふ事なし。

敵味方、精を凝らし、目を睜て、悉く之を觀る。この時の場、一たび仕損ずるものならば、身は双方の笑ひものとなるのみか、味方の大辱、あゝ之を如何せん。たゞ死あるのみ、されど、全軍の恥を殘して身獨り死するは勇士の本懐に非ず、如かず、生きて君命を遂げんには。此處に至りては既に人力の能くする處に非ず。天地神明に伏して、冥護を祈らずんばあらず。たま〳〵叙し來りてこの數語を挿む、文の老手。

與一目を塞ぎて、南無八幡大菩薩、別しては我國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須の湯泉大明神、願くは、あの扇の眞中射させて給はせたまへ、是を射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に再び面を向ふべからず。

伏して神明に祈り、生還を請ふ。勇士の心懷憐むに堪へたり、之を察して涙なくんばあらず。

今一度本國へ歸さんと思し召さば、此矢はづさせ給ふなと、心の中に祈念して、目を開きたれば、風も少し吹き弱りて、扇も射よげにこそなりたりけれ。

至誠天地を感ぜしめたり。波も心も一時に平靜となる。

與一鏑を取りて番ひ、能く引きて、ヒヤウと放つ。小兵といふ條十二束三伏、弓はつよし、鏑は浦響くほどに長鳴して、過たず、要際一寸ばかり置きて、ヒイフツトぞ射切りたる。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

與一の弓勢には鬼神も感せりと覺しく、鏑長鳴して屋島の浦に油搖く。いかにはするとて待ちかまへたるに、矢はいよ〳〵放たる衆目其行先にいよ〳〵添る。敵といへ、味方といへ、手に汗を握りて心も心ならざるに、矢はあやまたず、扇の要際、アレトいふ間に射ち切つたり。

鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみ揉まれて、海へさつとぞ散りたりける。皆紅の扇の夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮みぬ沈みぬ、ゆられけるを、沖には平家、舷を敲きて感じたり、陸には源氏、箙をたゝきてどよめきたり。

鏑、鳴音を殘して海に入れば、全紅の扇空に躍る、躍ると見る中に、春風にもまれて、サツト海に入り、白波の上に漂へるさま、春の花の、夕日に榮えて海上に散りみだるゝに似たり。勇士必死の大波瀾、靜まらんとして、更に壯觀を現ずる勇壯に驚くか、美觀に打たるゝか、沖の平家も、陸の源氏も、敵味方の境を忘れて、嗚呼去ばしも止まざりしも宜なるかな。盛衰記には、此あまりの面白さに、平家の一勇士、彼船に上りて、薙刀取りて一さし舞ふたるよしを叙べたり。海には敵を誘ふの美姫あり、陸には少壯の勇士、我を神明に祈び、命を一矢に賭して、事を決す。これ當に武夫の涙を灑ぐべき處、文は平淡にして、而も景を盡し情思縱横、同情ある者の筆に非ずんば、豈ぞこの妙あるを得んや。蓋しこれ一篇絕好の敍事詩ならずや。

苦戰奮鬪場裡、この悠長事、恰も運動會の遊戲に似たるを覺す。古人の陣中綽々として餘裕あり。

* * * * * * *

柴野栗山は、寛政三學士の一人なり。曾て此一節を漢譯す。殆ど一字一句を捨てずして、原文と其佳を競ふ。眞にこれ飜譯の絕品。由りて左に之を掲出す。

既而阿波讃岐叛二平氏一。而待二源氏一者。所在山洞。往往十騎二十騎。相將而來歸。判官兵及二三百餘一。當日日向レ昏。不レ可レ決レ勝。源平交收レ兵而退。海上艷二裝一小舟一。望レ岸搖來。距レ岸七八段。轉而横レ舳而止。源軍疑而視焉。舟中出二宮娃一。年可二十八九一。綠衣紅袴。開二純紅扇畫二旭日一者一。挿二竿樹二之船頭一。向レ岸而招。判官召二後藤實基一。問曰。彼欲二何爲一。對曰。是慫レ使二我射一也。臣意政者將軍進當二矢道一。而觀二嬪姬妓一。則欲二巧狙而射殪一也。但扇則似レ可レ使二射者一焉。判官曰。我軍可二能射一者爲レ誰。對曰。巧射固多。就レ中下野國人那須太郎資高之子與一宗高者。力雖二稍劣一。而手則巧利矣。判官曰。有二徵乎一。曰。諾。其賭二射禽鳥一。三必二得矣。乃命召レ之。與一尙二十左右之男子也。披二茶褐戰袍一。紅錦飾襟袂。擐二青絲甲一。佩二白帶刀一。背負二一箙一。二十四枚斑羽箭。加二挿鷹羽鳴鏑一枚一。腋二挾滋藤弓一。脫レ盔繫二諸紐一。進而跪二馬前一。判官曰。宗高。汝射二扇正中一。令二敵軍爲一レ目則如何。辭曰。臣自料不レ知二其可一レ能也。若誤射。則永爲二我軍巧矢之辱一矣。請更命二必能者一。判官大怒曰。此行發二鎌倉一趣二西國一者。其豈可レ違二義經之令一。若毫存二枝梧一者。宜二速歸二鎌倉一也。與一私謂。若再辭恐成二忿意一。乃曰。然則其逃則臣不二敢知一也。既有命矣。請嘗二試之一。乃起。誠騎二驄駿一。金覆鞍鞍。以跨レ之。笠頓弓在手。促レ轡向レ汀而步。我兵目送久レ之。皆曰。此壯夫定能者。判官亦視似レ以爲二委任其人一焉。既的頗遠。驅レ馬入レ海一段許。距レ扇猶存二七段一。與近。時二月十有八日。日已加レ酉。會北風劍烈。高浪打レ岸。船乍浙乍因而漂泛。扇亦不レ安レ竿而閃爍。海面則平軍一行。列レ艦而注レ目。岸上則源軍並レ轡而監視。何者不二壯觀一矣。與一閉レ目默禱曰。南無八幡大菩薩。然若國日光權現。宇都宮。那須。湯泉大明神。請令レ射二矢扇正中一也。若誤レ事者。折レ弓自裁。而不レ可二再向人一也。神欲レ使二一歸一不レ謬者。此矢勿レ使レ逸焉。既開レ目風稍恬。扇如二容レ射者一。乃取二鳴鏑一架上。引滿而發。雖二稍劣力一。而十二箭飛鏑。響レ油長鳴。射二斷扇眼上一寸許一。餘力遙去入レ海。扇則揚而舞レ空。被二春風翻弄一一再。飄然散二落海中一。紳紅之扇。夕日映發委二白波一。浮沈泛泛。舟師擊レ舷而賞贊。陸軍鼓レ箙而踊呼。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○達人は通人なり仙人は俗人なり

榮辱成敗に念ひを掛け、時の遇不遇に慣ふる族こそ、其の品格の等級は推測らるれ。つら／＼世の實相を觀じて、人事の眞消息を探れば、凡そ國家の爲めに盡瘁すなど言ひ觸らす者の、大抵は至つて淺墓なる所以を覺了すべし。平生の講學、古しえより其の道あり、常に靈覺を磨き、神智を養なひ、八窓玲瓏の識見に徹底して、斷えず非凡の先見に慣れ、遠く西東古今に尙友して、而も實事に適應するに滿足なる手腕と技倆とを練磨せば、遇不遇は抑そも末なり、亦何の求むる所ありて惶々焉として他に賴らんとするヿをせんや。世の用ゆると用ひざるとによりて吾に榮辱あるにあらず、榮辱の鑑自づから我に存す、何んぞ他に問ふて而して後ち決せん。遇不遇とは抑そも何の謂ひぞ、順境逆境等しく是れ吾境にして、世路の嶮易高低のみ、之を歩するに於て何の不思議かある。知遇に狂喜せざるは、不遇に怨怒せざるに同じ、此般の事其の心緖を亂さざるに至つて、初めて人事の眞相を談ずべし。若し夫れ日々學を講じて吾が靈臺を磨き、步々天地の新しき光景を詠め、又、慈心自づから動く所ろに感應して、至誠其の救濟に工夫するヿをせば、凡そ世人通常に言ふ所ろの事の如き、抑そも如何にして其氣に乘らんや。古人屢ば、成敗を問はずと云ふ、其の問はざるものは大いに信ずる所あれば也、之を苟且にして蠻勇妄斷するの謂ひにはあらず、既に大道に安んじて大成を信ず、何んぞ故さらに成敗を問はんや、之を問ひ之を顧みるの疑念なくんば、之に憂慮せざるは當然の措作ならずや。古人又曰く、百年に知己を待つと。百年の句を單に形容文辭と做すなかれ、十年に機一轉し、五十年に運一轉し、百年にして一世轉廻す。百年以前に於て世人の未だ窺がひ知るヿを得ざりし所のものは、百年以後に於て世人皆な其の消息に適ずるに至る、百年の後は即はち自から知己あるの時なり。嗚呼、世人の古聖先哲に於ける敬遠亦甚しき哉、大抵之を仙に比して其の言の深く當代に適合する所以を思はず、高踏出俗の所見現に實際に用なきが如く言ひ做すもの、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

豈に識見の小さくして、潜思の足らざるが故にあらずや。聖人は通人なり、哲人は粋人なり、其の言大俗、其の情卑近、但だ其識遠大にして、見る所の廣濶なるが故に、人或は之を日用當座に不便なりとす。彼の巨家富豪の開祖を見よ、誰か其の通俗機敏の才商に背ざるを目して笑はざりしものある、而も其の百年の大成は儼として今ま諸君が目前に立つにあらずや。此を以て彼を推す、其の大要を測知するよを得ん歟。

○水鳥水に跡なし

優れたる劍士は其の刀の跡を見せず、巧みなる大工は其の鉋の跡を殘さず、此を以て老練せる偉人の事を成すや必らず痕跡を消さんとす、否な消さんとするのみにあらず、初めより痕跡なからしめんとする也。之を望めば渺漠たり。其跡茫洋たり。大功もとより名なし、誰か之を是非せん、既に是非なし安んぞ毀譽あらん。機端に先だちて了し、機后に怠たらずして收め、其の忍ぶや忿はざるが如く、其待つや忘れたるが如し。機先を迎制して夙とに事を了する故に、將に臨みて忙はしく奔走せず、心閑に、躰寬やかに、自から仙骨を流露す。準備既に成り、手腕優に存して、密かに機を待つ、機熟して感應著じるしく。恰好に處置す。其の術天工に助し、天時に應ずる故に、人之を覺らず、自然開發の狀あり。古人歌ひて曰く、眺むれば何の苦もなき水鳥の足にひまなき我思ひかなと、水鳥の悠々たる、其足役々、而して行くに痕跡を殘さず。嗚呼、偉人の自から收むる所ろ亦巧妙なる哉。

○天地常に微笑す

四時言はずして事工自から成り、天星言はずして文章自から成る。造化の万象を營むや、沈々晝夜を舍かず、而して成れども自から有せず、失なへども自から怨まず、長ずれども自から用いず。次第に開展し、次第に收縮し、或る時は待ち、或る時は進み、其理を破るものを容易に恕さず、久しふして屈せしめ、其道に贊するものを輕々しく賞めず、久しふして安んぜしむ。嗚呼、天や地や、何んぞ高厚にして偉大なる。我其の懷に立ち其の傘に覆はる、但只だ其時工に助し、其の命運に作し、其の攝理に和せんとす。希はくは、我が小なるを容れて其の大なる裏に融けしめよ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雜録

樂界の秋色

（史傳『西樂餘韻』參照）

青柳有美

神無月には神いまさず、出雲の宮居に隱れまして、あやしき絲ばかり給ふさ聞けざ、繪畫彫刻のミユーズのみは、十月小春の長閑き空に浮れて、四千丈の帝都に集り給ふ。我が奏樂の女神男神も、諸の神たちさ共に出雲より歸りまし給へるにや、霜ふる月の十一月、また都は西樂の歡聲さなりて、何處の演奏會かしこの音樂會さ、奏樂の大晦日なるも賑しく忝なや。これをしも、樂會に食傷すなど稱へて、感謝の念足らざらば、冥罰誠に恐ろしきことなり。殊には應和會さぞよべる斯道に志篤きものの懇話會など、又一段の樂なりさや云はん。いで、提琴の音うるはしく、和聲の興妙なる樂界の秋の景色、しばらくこれを驢馬の耳にうつして、ほのぼのさ仰ぐさころあらんか。

〇同聲會秋季音樂演奏會

踊りてのち、泣き祈り且つ歌ひ、而して狂ひ悶ふること、大凡そ一時間。これ秋の同聲會が呼物なり。さればさて、始めより終まで、悉く我れを動かせしさいふにはあらず。たゞベートーフエンがソナタ第三番の獨彈さ、ヴ井オリンのレゲンデ獨奏さに打たれたるなり。これぞ此日の白眉ならむ。内田菊子君の樂堂に現れざりしやこゝに久し。されご世には俠氣ある坂部氏の如きありて、ケーベル教授の言にまかせてか、志きりに君を揚げしも、我れはこれまで君に動かされたること殆ごこれなかりしものゝ一人なり。たゞ春期演奏會の時なりしか、一段の進境に入られしよさ覺えしのみ。而して、いまソナタ第三番の獨彈を聽くに及んでや實に坂部氏の讚辭の全く空からざるを了せりさいはんか。古き既往はいざ知らず、この三四年、原作者を傳へたる人忍が岡の樂士中殆んごあるなし、一人もあるなし。たゞこの日、菊子君始てよくこれをせり。女性の常さして稍々その鼓動に力を欠き、雲を隔てゝ之に聽くの恨みありしさ雖ごも、ベートーフエンが心に火柱の如く立てる至大莊嚴複雜の實相は、確にその一部を之によりて我等に傳へたるものゝ如し。共なりしさころの詩人藤村子また感歎措く能はずして曰く、これ實に暗澹たる黑雲勃如さして天の一方に起るも、愛光燦さして其間に照らすの相なりさ。殊にはそのペタルの用ひ巧みにして、藤村子が所謂黑雲を起こすさころ、景中の景なりさもいふべきか◉幸田延子君が此の日の演奏ヴアイオリンーレゲンデの曲も又驚くべきものゝ一つなるべし。われは之を以て歸朝以來最上の出來榮えなりさ讃せん。そのレゲンデさは『物語』さの意なるべく、如何なることのレゲンデなるか我れ之を知られざ、自ら一種の恐怖に驅られ、何さなく、もの愴くて、慄ひ出んさせしを思へば、古き希臘の怪談にても仕組みたるものにや。近頃世間には女史を攻撃するの聲甚だ強きものあるより、この日特に力を注がれたるためか、その腕揮ふる巧みなりさいはんよりはすごく恐ろしかりき。元來女史の腕に微妙伶巧の曲ならんよりは壯大雄麗のものに適す。されご今にしてまた思へば、このレゲンデの如く、狼が寒夜月に嘯く如き、或は妖艷の旅人をおごさんさする如き或は海賊船を走らして獲物を海にあさらんさするが如きものこそ、更に最も適するらめ。女史は此の日和裝せられたれば、弓の力に充分の見榮えを添へ得ざりしこそ上なき恨みなれ。湖氏がピヤノ作奏は、稍々氣取り過ぎて、調和の機微を欠けるものゝ如く、まことに惜しきことなり。されご、延子君の氏を作へるは日新くして難有かりき。我れは終に女史のため輕快洒然たる洋裝を勸めんさ欲す◉妹幸子君がローデ氏作コンサルト獨奏は、尋常さいふのみにて卒業演奏會のコンセルチノには比ぶべくもあらず。加ふるに前半曲の、臆病氣に勝たれて見えもし聽こえもせざれば、何故にや。亦、己れ弓を取らざるも、すでに作奏の始まりたらば、身は最早や曲中にあるものなり。されば全心をその作奏の音曲にさゝげて、胸中燃ゆるが如くに湧き煮たち、これが勢に乘じてこそインスピレーションに驅られて、弓を取りもし歌ひもすべき筈ならずや。さるをその心掛けの更になくて、餘所ごさの如くに聽きながし、我が部に來りて急に思ひつきたる如く 弓取るごさきに至りては、樂士の愧づべきことなり。而して、幸子君が此曲を奏せんさして、その弊を還ひしごさかりしもなさけなや。作奏の延子君終の頃に至りて、曲譜の紙如何にしけん、一度ならず二度三度折れご反せご、仲々に反へらず、是に於てか一種のインスピレーション俄にその胸底に燃えたるものゝ如く、麗火忽ちその面に溢れ、更に一段の力を添へて、曲譜なく彈じ終りたるさま勇ましくも又心地よげなり。◉それオルガンの長ずるところは、ピヤノの輕快痛切なるに反し、幽邃沈痛なるものありて、何さなく大人君子の態度あるにあり。さればかゝるピヤ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ノ、ヴァイオリンの數多き番組の間に立て、特にオルガンの演奏を試みんとするの大膽あらば、よろしくオルガンの特長を發揮して、幽遠深邃の曲を撰ぶべきなれ。さるを、考慮玆にいたらず、たゞ偏に面白ろからんことを欲して、オルガンのみの番組ならば、或は喝采を得べしと思はるゝ輕快なるローマンスの曲を撰ぶ。加ふるに、ショッパンはピアノの名手にして、オルガンはその得たるものに非ず。是に於てか、天谷秀君がショッパン氏作ローマンスのオルガン獨奏は、全く失敗に終はれりといふべし。◉頼母木駒子君橘糸重女史とのヴァイオリン、ピヤノ合奏モツァート氏ソナタ第六番は、寧ろピヤノに勝を占められたりとやいはむ。頼木母子がヴァイオリンの批評は之をしばらく後に讓るも、糸重君の近來格段の進境を見ず、可もなく不可もなく、却て後進のために押し攻めらるゝの傾あるは、悲むべきことなり。このまゝにして遂に過ぎなんか、遠山女史と共に境沺洛のほか、又道なかるべし。是に至りて坂部氏の言當らずといふべきなり。

○日本音樂會園遊音樂會

集るものも、二百名を超えず、會費も一圓、會長は鍋島侯、凡て貴族的の會合にて、雅樂部の管弦樂と軍樂學校の吹奏樂と交互の演奏なり。場所は植物園とて樂山の景色など美はしく、秋のながめも面白ろければ、吹奏樂は之を那邊の森に奏し、管絃樂は之を屋内に調べ、會衆その間に逍遙して相樂むの計畫なりしも、雨烈くして果さず、皆な之を屋内とそのほとりになせることとて、妙味少く、音響の模樣さへ、天井の低き故にや面白からず。もし又その合と樂と吹奏樂とを貌に見たてなば、我れは管絃の方に團扇を揚げん。殊に新しく珍重なりしはその奏せる「俳優進行曲」と稱ふる一曲にて、小太鼓の獨奏ある所など洗痛癡に豁く、喜多氏が能曲「櫻井驛」もありけり。

○音樂懇話應和會風生談

これにても、近頃は、批評家といふものゝ仲間に見なされたるにや、第二回の音樂者懇話會なる應和會に來よと招かれたれば、恐れながらと、日本音樂會のかへりし翌日亦小石川の植物園に行きぬ。集るもの天狗博士と呼せらるゝ山居士あり、米國青年風の上田敏氏あり、端麗なる多氏俊麗なる納所氏超俗に蟬の上眞行氏脱蟬超俗にして丈も奇聲なる東儀季治氏身の丈こそ小さけれヨブが說けるてふ頭に鈴ある天馬の如しと思はるゝ坂部行三郎氏其他學者めける鈴木米次郎氏奥好義氏音樂學校及雅樂部の教師職員など合はせ卅有餘名あり。始めは其處により、かしこの芝生に行き、坐しては立ち立ては坐し、集りては散じ、散じては集り、各々一團をなしてぞ談りける。而して何處の群にゆくも、聲高く聞ゆるはオペラなる歌劇のことなり。どうかしてオペラが欲しいもので。せめてオペラの卵でも。十年もこれからかゝることだらうよ。イヤそれは十年も十五年もかゝるだらうが、種々の子の損なものは直き出來るだらうよ……そんなにたいがさも』と横槍を入るるは奇聲先生なり。こゝに端聡先生は新なる說をなして曰く『まづ當分はあの活人畫といふので間に合はせるだ。人は人で出て、だんまりの樣に所作をやるんだ。そうして後ろの方で、それに合はして歌ッたり彈いたりするんだ。』また、傍側の柱にもたれて庭をながむるは、『威海衛』の作曲者山田源一郎氏なり『昨日は日本音樂會にお出になりましたか？』と問はるゝまゝに『はい』と口ほどきして『一體雅樂部は獨逸樂で、軍樂は佛蘭樂なのは、どふしたんでしようか』と問ひ返へせば『サー……日本人には、まだ獨逸樂は高尚過ぎて、矢張り北歐の音樂よりは南歐の方が適する樣です。然し、進んでくれば、獨逸の方が深くつて高いところがあるものですから、面白くなりますが。日本の能は餘程オペラに近いものでないでしようか？』然しあれは樂を度外にして、文學文辭に重きを置て居りますから……西洋人なんか、觀ても少も面白くないそうで、音樂ではない音響だッて言ふそうです……芝居の所作事なんか何分かオペラに似て居ますが、多分は影淨瑠璃でやるもんですから……これとて……まさか、あちらまで勉強にゆくのも大袈裟ですから、教師を雇ふんですナ。オペラさへやりだせば西洋樂の普及も容易でしやうから一つやりたいもので……耳からばかりでは仲々這入りにくいから、目から入れて印象を強くせれば……。それにしても、二三人音樂學校の卒業生が組んで、なるべく女も入れて、非常な獻身犧牲の精神を以て、自分の名譽と位置は皆な賭ける程に寄席に這入ッたら、西洋樂が普及することが此度出來るだらふと思ひます。然し仲々……そこが我々のまだ足らんのかも知れませんが……いくら說いても今の様な寄席に這入る氣になれません……今少し樂人の品格を高めれば』またこなたの室の一隅には二三人寄れる群れあり。こには上原六三郎

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

こゝさ[illegible]高等學校の物理學教官中村[illegible]音樂は好きさいふでもありませんでしたが、遂に教授上の都合から研究する必用があつてやりましたら面白くなつてきまして……一體日本人のは雅樂の調なんかでどの位になつて居るものか定めてみたいさ思ふて……』などゝ談は三人共に音程音階の議論に入り一セコンドの振動が獨逸にては四百四十六程なり英吉利にては稍低くして何程なりなど仲々隆なりしが話頭一轉、日本音樂さ西樂さの調和に入れり×尺八にヴアイオリンの譜を少しもぢつて置てピヤノに合はしたら、よからふさ思ふが・サー……ヴアイオリンならどうだらふ×あまり音の種類が同じだから駄目だらふ……然し尺八も西洋樂のヴアイオリンさいツた風だ仲々六ケしいから、大抵の人は中途でやめる……それだから尺八の指南でくらして食ふなんさいふのは餘程の間迸だ。』兎角するうちに一同卓に就き正餐の開かるゝ旨宣告ありて、坂部氏委員に代り挨拶を述べ、外山博士の祝詞あり、其言別に新しさいふにもあらねば、こゝには畧しつ。後投票のことありて配膳さなる。談はプログラムのことに關して我がほさりより起れり。×此頃明治音樂會から始めて歐文を入れだすので、餘程わかり易くなつた。原語を譯して書いたらどうだらふ×矢張りわからん……曲の大意でもいれるさよいがれ』さ話の盛なるうちに、多諧家さ思はるゝ鈴木氏新說を出して曰く『その曲の感情を例へば「松風蘿月」さいふ類梅に、日本にこれまである文雅な文字で彰はしたら、どふかしらんなんさも思ふ。』彼是れするまに追々散會の摸樣さなり、一人去り二人去り殘るは頗る少數のものさなれり。時にやゝ光を離れたる方に一種異樣の相貌ある人の帽を手にしたるまゝ毅然さして立つありしが、一見尋常ならず思はれければ、刺を通じて交を乞はんさ云へは、こは牧野富太郎さ稱へて植物園に主事さなり、日本植物史の編纂に從事し居るも、音樂には志篤く、明治年間出版の音樂書は、一さして所藏せざるなしさ聞く。しかるうちに、天馬の君、その鈴の如き聲を上げ來りて曰く『橋塲の樂人萬歲』さ『僕が一昨内田君を揚げるのは、その非常に氣の毒な事情にあるを聞て居るからだ。一昨君は橋塲のミューズからは餘程、お禮をもらつてもよいぞ。こん度行つたら、お禮に應和會に這入つてもらふ樣に賴んでくれたまへ。然し君あんまり讃め給ふな。乘地になるさ困るから』さ、是れも天馬の君の言なりけり。一同益興あることに思ひて、たち騒げば、かねて無口の納所氏まで口開きて『あの人は一體言ひさへすれば、こんな所に來る方の話なんだ。』さ。われも亦『そう惡口ばかりいふものでないよ。仲々珍らしい奇拔なさこのある女だ。あの奇拔なのが樂の方にも屹度顯はれるから、僕は惡く言はんのだ』などいふ。八時の頃、皆月を踏んで歸る。途すがら東儀季治氏、わが言にまかせて

中西梅花が『靜御前』

に曲譜を附せらるべしさいふ。愈々出來上れる上は、納所辨次郎氏之を明治音樂會に獨唱せらるゝに至るべく、わが數年來の希望こゝに始めて成就するを得て、うれしさ忍び難し。蓋し、梅花の『靜御前』は、明治年間の新躰詩中、歌ふべき詩さして殆んど唯一無二のものならんかな。我がこの想ひを懷けるや久し。今や、超俗奇骨なる東儀季治君が樂想に觸れて、樂化せられんさす。これなほメシヤがヨハ子の水に洗ひを受けたるにも比ぶべきか。あゝ詩姫よ、鳩の如く上より下りて、東儀氏を祝福せよ。途すがらの快話も風生放論にて、われ『音樂學校が獨立したら、どうも「學校」では色々不都合だから、「東京音樂院」さ改稱するがよい、さいへば、例の天馬の君『どうして、そんな勇氣があるものか。僕は寧ろ音樂座校全廢說だ……どうだ』さ呼ぶ。また『今度日比谷の原に公園が出來るそうだが……あの邊は俗氣の中心なる日本橋や京橋の近邊だから、東京市で日曜の午後毎には樂隊を出だして趣味を注ぐ樣にするさいゝ』さいへば奇警先生『然しまだ彼等には日曜さいふ觀念はないから……朔日さ十五日さでもいふ風にした方がよい』さいふ。是れに似たる話は會のうちにも、かのスコツトの痩せたる如き面持ある鳥居氏によりて語へられ居たりき。遂に神樂坂の上に背き別れを諸氏に告げんさすれば、多、納所、兩氏など『十日の明治音樂會には、是非來て聽てくれ給へ』さいふ。同會員諸氏の熱實眞に驚くべきものあり、その樂道に忠誠あること、感激堪え難し。

○音樂學校秋季音樂會

音樂學校は新主事渡邊龍聖氏によりて、好事務官を得たりさいふべきか。陰に陽

に楽欧のため相盡すこと、まことに尋常ならず。今は又学校自らその成績を天下に公にせんとして、新にこの会を開く。龍平君たるもの亦勉めたりといふべし。されど、悲哉、この会の成績寧ろ却て同楽会秋季演奏会に劣れる如きは惜むべきことなり、しかはあれど来賓雲集、眞に満堂錐を立つべきの餘地なし◉瀧廉太郎氏の現はるゝや、例によりて拍手湧くが如く、大に待つあるものゝごとかりしも、聴き終りて失望禁ずる能はざりしを如何にせむ。バッハがイタリヤニッシエス、コンセルトは細くして巧なる曲の如し。こは頗る廉太郎氏に適はざるものなり。此の如きは宜く之を菊子君に譲るべく、瀧氏の本領や、寧ろ雄大にして血気あるにあれば、ベートーフエンの如きは、却てその取るべきものなれ。瀧氏にして此日もしかのソナタ三部を弾じたらんか、之に勤くもの或は菊子君の時にまされるや豫め計るべからず。殊には、如何なる故にか、終局にいたりて尻きれ蜻蛉の物足らぬ心地ありしは、かえすがへすも恨めしき限りなれ。我必ずしも出来栄え悪しかりしといふにあらねど、たゞ撰曲の道、その當を失せりといふのみ。是に於てか、我れは瀧氏にベートーフエンをすゝめ、菊子君にモツアートを勧めざるを得ず。モツアートの聖や、眞に内田子に適ひ、ベートフエンの偉や、眞に廉太郎氏に適す◉この日の白眉は、粗垣木橋幽子のヴァイオリン、ピヤノ合奏のヴァイオリンと職員生徒などのヴァイオリン合奏なるヘーンデル氏がラーゴの幽さに占められたり。元来、粗垣木コマ子君のヴァイオリンなるものは、一種キザの眼味ありて、そのところ稍々ユンケルの癖に似て大に及ばざるものゝ如し。我れ之を聴く毎に常に不快の念禁ずる能はざりしが、近頃に至りて如何なる風の吹か胸底に吹き入りてか、全くこのキザの風を去るに至れることぞ有難けれ。されど、之と共に、その異彩をも戮すべかりし特得の気力を欠くに至りしは惜むべきことなり。この日の(ホ)短調ソナタの曲、殊に其前半は、確に作曲者モツアートが聖なる影を我等に窺はしめたるものゝ如し。是に至りて、我れは遂に日頃の粗垣木攻嬢の甲を脱し、その卵を予に謝せざるべからざるか。欄女史この日頗る振らず、全くヴァイオリンにうち消されたるも口惜しや。女史たるもの勉めざるべからず◎遠山され子女史、近頃ピヤノの座を後進に譲りて、自ら現はれざるは惡し己れを知るものといふべきなり。昔はスコット一時詩を以て全英に名あり。悟くにしてバイロン出で漸く天下に迎へらるゝを見るや、まづ早く隠れて散文界に入れり。遠山女史の今井新太郎氏と共に、此日生徒を率ひて、箏の合奏に現はれたるは、なほ、スコットが散文界に打ち出でたるにも比すべく眞に賀すべきの至りなり。益々これに進まむか又我が楽界を利すると少なからざるらん◉ヴァイオリン合奏ヘーンデルがラーゴの曲は、宗教の趣あるものにや、清くして俗腸を洗ふに足るべく、よく作曲者の意を備へたるものゝ如しといはん。延子君が伴奏又仲々の出来なり。これによれば、獨治馬の攻撃も一方ならぬ薬さこそ思はるれ◉この秋に入りてより、器楽が一段の進歩をなして、各々よく原曲の感情を讃はすものあるに至りたれば、音楽学校の名物とまで囃せられ、殊には超然脱俗の上氏ありて、之を指導せらるゝこと尋常ならざる聲楽も、却て稍々その光彩を鈍くせる如きは、こよなき恨事なれ。彼の男聲にひしがれたりと批評せる女聲は、またこの秋よりは生き歸りて、再び女天下の昔に戻り、王の如きバス、方伯の如きテノル、其妃な撰ふ能はず、かの同声会にありても、この日にありても尤も元気よきはアルトの組なり、サツプラノは稍々びれる銀鈴の如く、萎枯れ聲なるも惡しや、男聲また再び必死奮闘の心掛けあるを要す。加ふるに全体の上より今一段の調和こそ願はしけれ◉さきには、ピヤノの弾奏に難を流せし高木ちか子君の聲楽に美音を揮るはふゝも亦悦ばしきことなり。この日の天の岩戸なる合唱は絃楽四部に吹奏楽さへ加はり、人聲殆んど楽器の響にうち消されて、千早振る神世の昔、天安河原に遊び給へる神たちの騒ぎも斯にかくありしやと思ふほどなりしが、そのうちに、わけて高木ちか子の聲のみは秀でゝ聴えにき。また七八十人籠れる單音の合唱にもかのみひとり耳たてり。されば、ちか子君たらん身は、よろしくこの特長を利用しく勵むべきならずや。

• • • •

之を要するに秋の奏楽堂は、成効のうちに閉されたり。是れ偏にケーベルの新に入りて教鞭に預ること其源なるべけれども、社会の楽を眞ずること多きに至り、雑誌の批評家亦屡此處に現はれ出でたるにもよるべし。されどなほ不親切にして真面目ならず、学者らしき顔つきしてたゞ番組を並べたる如き楽評をなす人のあること、つら惡くけれ。

時　文

●文界漫言

なにがし

◎飜譯小説

馬琴の小説は、其種を、支那小説に取るもの多かりしが、明治の小説は西洋殊に英米小説中の一二の結構もしくは、其小品文を摘み上げて、翻案したるもの、其多きに居り　今の大家と呼ばるゝ紅葉すらなほ然り、新作家連に至りては、殊に然りとなす。

今の小説といふもの、結構單純、思藻淺薄、勝けて讀むべきもの殆どあるとなし。蓋し、今日は、なほ修養時代に在り。此時に當りては、及かず、盛んに高尚純潔なる西洋小説を飜譯し來りて、廣く江湖に行はしむるには。然れども此この飜譯を成就し得べき文士に乏しきを如何せん。されど此頃は、明かに飜譯小説の銘打たつるもの、ポツ／＼と見え出したり。吾人はなほ其進んで、彼の大作を我に輸入するに至らんとを望む。然れども社會一般の讀者は、雜誌にすら西洋種のものを好まざるなれば、其飜譯小説を歡迎するの日に至るや未だ近きに非ずして、甚だ遠きやの感あり。

飜譯小説の、一般讀者に不向きなるは、其譯文の拮掘聱牙なるに在り。また人名地名の、聞き馴れざるものにして、爲に感を惹き難き、其趣搆談話の我に縁遠き、而して今の譯者自身すら、彼の事情に通ぜすして、大膽に飜譯を企つる如きに由る。然れども譯者に其人を得て、讀者之を讀むに馴るれば、この難は自然に消え行くべし。

◎飜譯難

一國語は、之を使用する國民の上に不可思議なる魔力を有するものにして、この魔力は他國民の得て感ぜざる處なり。されば甲の國語にて成れるものを、乙の國語に飜譯する時には、如何に巧みなるもこの魔力乍ち消滅するを以て、其の面白味なるもの無し。これ飜譯の難き所以なり。難きといはんよりは、完全なる飜譯は到底成就し得べからざるものなりといふも不可なし。然れども、甲乙國民相通ぜんとすれば、是非共飜譯なかるべからず。飜譯の法に、凡そ二種あるべし。も、單に意を通ぜしめさする爲めならば、原文の言ひ振りに、強ひて拘泥することなくして、まづ意の我に通ぜんとを計るべし。學術書の飜譯の如きは、實に此法によるべし。もし又詩文の如きものゝ味を知らさん爲の飜譯ならば、成るべく、其言ひ振りを嚴密に直譯すべし。直譯して、我に解し易からしむるは、譯者が文章の伎倆に在り。さりながら、其いづれの法を取るにもせよ、他國語を知ると、自國語を知るが如く、二三マザー、タングスを有する者ならでは、意も味も巧熟に捉ふべからず。我國は、現時、甚だ飜譯を必要なりとするを以て、かゝる文士を俟つや切なり。

◎小説の對話

西洋人は概して談話巧みなるを以て、日常の對話を、殊更に彫琢せざるも、なほこれを小説に用うべし。然るに我國人は彼に比すれば、對話甚だ下手にして、從つて小説を結構するに、殊更に談話を工夫せざるべからず。現今の小説には、概して、以前の如くに、和語漢語めきたる對話なきやうになりて、成べく日用の談話語を用うれども、されどなほ人々日常の對話に接觸せざるもの多し。小説中の人物は、實際の人物よりは、いづれも多辯なり。

西洋人は食卓の傍に、ストーブの側に、家族友人團欒して談話するとを好めば、自然に談話術は巧みとなり、其談話は多面多角に發達す、然るに、日本人はかゝる嗜味に乏しければ、談話は下手なるも當然なり。たゞ江戸ッ子は、長火鉢の傍に、煙管くはへて、談話するとを好めば、其對話するや、中々に巧みにして、田舍者等の、二三舍を避くる處なり。小説家は自ら對話に巧みにして、また之を好むものならざるべからず。されば、小説家は江戸ッ子を以て最も可なりとすべし。紅葉露伴が成功も、彼等が江戸ッ子なるに歸すると、必ずや尠からざるべし。

妹がりと馬に鞍おきていこま山　讀人不知
打越えくればもみぢちりつゝ

新刊書

◎ビスマーク公清話　村上濁浪譯　裳華房發行

ちやーろす、ろーゐ著す處、ビスマークス、テーブル、トークあり、公在世の日に成る。近時村上濁浪、其梗要を抄譯するもの之を『ビスマーク公清話』といふ。學生時代より普佛戰爭に至るまでの公の榮譽ある生涯の紀事をば、ビスマーク公の談話によりて述べ來りて、頗る一讀を價ひす。

◎前橋案内　野條愛助編纂　鏡城館發行

此書は生絲織物の特産地たる上州の樞機を掌る前橋市の地勢區劃、人口、産業、沿革、神社佛閣、名所舊跡、學校、新聞、兵事、公衙、其他閑話、名物等を詳述するを甚だ勉めたるものにして、六千三百餘戸の一市を記述するに、菊版二百六十餘頁の冊子を以てしたるを見ても、如何に、其精密なるかを知るに足る。前橋市なるものを知らんとせば、必ずや此書を見るべし。

◎しら露　後藤宙外著　春陽堂版

二人の女學生もと親交あり、等しく洋行歸りにて、己等の教師たる、一紳士を慕ふ一人は思を遂げんとして、病に斃れ、一人は失戀に陷る。紳士の人生觀、人情論などもあり。例の女學生的戀愛小說なり。讀去讀來敢て異彩を認むるを能はず。

◎Classical Tales of Old Japan.　武信由太郎著　ジヤパンタイムス社

ジヤパン、タイムスの文學記者武信由太郎氏の著なる此書は、兜軍記、妹背山、大森彦七、傾一葉等古今の戲曲十數の梗概を譯述したるものにして、これ等は曾てタイムス紙上に載せられたるものなり。武信氏の英文に於ける有數の名あり。其記する處要を得て、文字流暢なるとは、いふをまたず。製本美麗、印刷は日本出來としては、珍らしきほどに上出來なり。以て外國人への贈物には好適すべし。ただ、挿畫の粗末なる丈は遺憾なりといふべし

◎日歐交通起源史　曾菊太郎著　裳華房版

此書は、北海道札幌農學校學生曾菊太郎氏の著に係り、博士新渡戸稻造氏の校閱を經たるものなり。我邦が古來東西の諸外國と交通したる形跡につき、人種上より歷史上より、臚陳記述したるものにして、引照極めて該博、著者の勞甚だ多しとなすべし。これ實に雜駁なる近刊書類中に、撰を異にして、精讀すべきものなりといふべし。

◎慈善問題　留岡幸助著　警醒社版

北頃の物議に上りし、巣鴨監獄教誨師留岡幸助氏は、多年各種の慈善事業問題につきて研究する處あり、造詣また淺からず。此書は即ち、其研鑽の餘に成りしものにして、一小冊子に過ぎずといへども、凡そ慈善問題の何たるを解せんとするものは、必ずや一讀すべきなり。中に、慈善問題と婦女子の一章あり。

◎農業本論　新渡戸稻造著　裳華房版

之れ實に近時稀有の大著なり、次號に於て之が精評を試みんとす。

新雜誌

◉女學新報第二號　津田梅子が十八年前の寫眞と、頌榮女學校卒業生仙波永子の寫眞とを存版し、次號には男爵坪井氏令妹道子、渡邊(小湘島)維子二氏の寫眞を揭げんと豫告す。又餘白に一句を插みて曰く、家事多忙之時、勿見新聞紙、玉閑暇可讀之、但女學新報非此限。

◉うらにしき第七十三號　其の表裝一新、頗ぶる優美となれり。錦の裏の心地はせねど、好み甚はだ立上りて見ゆ。シヤルロツト、コルデイの傳は愛讀すべし。

◉農業雜誌第六百九號　水蜜桃は川崎附近に於て寧ろ幼稚なり、千葉縣七福村に於て稍つ見るべきものありしとて、藤井米八郎君其實況を稍やかに記載せらる。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎大日本婦人教育會雜誌第百九號　木村揩吉君、艦船の沿革を演述するの序に曰く、女性と海軍の因緣淺からず、艦船の進水式には貴女之に臨んで命名式を擧げ、船は文法上女性なり、姉妹艦の名あり、イサベラ女王、エリサベス女王、ヴヰクトリア女帝は皆な海軍史に著名なり、何故女子は男子よりも海軍擴張に熱心なりやと云ふに、畢竟、公平なる觀念が男子よりも多き故ならんと。石塚左玄君の夫婦アルカリーの說は曾て本誌にも掲載せしが、彌出でて彌妙、眞に面白き研究なり。

◎婦人新報第十九號　矢島かぢ子上毛藤岡に於ける演說に、其の名字の變遷を說く。

◎新世紀第十號　本多庸一君、朝鮮漫遊談は有益重厚の實事談なり、武本喜代藏氏の「イエスは單に人なりや」の一文、何んぞ莊嚴沈烈なる。親ら苦練するにあらざれば能はず。小崎君「歐米の基督教」十年一日の調あり、千古不易と云ふべし。

◎世事畫報第六號　戶川殘花、岡野知十の兩文士加筆して生面一新せり。「青梅地方漫言」は都人士須らく注意すべし、何故か未だ此方面に氣が乘らず、惜むべきと也。殘花君、「放下の盛哉」讀者一讀一笑すべし。知十君、新聞事業を敍する中に、商況記者の爲に大氣焰を吐き、日々の野城久吉、朝日の井上房吉二氏に及ぶ。櫻痴居士が談話の中に、

富貴樓の女將が話しです、女將が料理人への注意にお手が三ッなつたら鹽をからくしなよ、といへども、僕は氣がつかなかたが、江戶ッ子は神佛を拜むには三ッ手をうち料理屋なんぞで呼べるは二ッならずとネ、そこで三ッならずと田舍のと見て鹽をからくしろとの注意だ。

◎臺灣協會々報第二號　後藤新平君臺灣拓殖に宗教の極めて必要なる所以を說き、而も今の宗教家の尙ほ足らざるを慨し、總督は之を補はざる可らずと論ず、大氣焰と云ふべし、杉村濬氏の『臺灣と支那沿岸の關係』は、其人、其談、同もに双ら注目すべき問題なり、支那人が澳門香港に於ける勝利を見て、臺灣に於ける將來を知るべし、戰勝の熱に浮されて實際の商益を奪はるゝ爲體、目あたり睹る如し。

◎日本人第七十九號　大隈板垣二氏の聞く所の一文、眞とに能く言ひ盡し遺憾なし、讀者誰か首肯せざらん、二伯といへども亦た辯なからんとする也。

◎統計集誌第二百十號　新に統計局設れ、新に統計調べの徵收あるに付、局長花房直三郎氏特殊の譚話解釋あり。度々新聞紙に見へたる英消紙四百万枚を入用すなどの誤解は明らかに辨ぜられたり。

◎教育時論第四八〇號　木村一郎氏の「皇居御舊跡顯揚保存資料要覽」は深く注意すべき問題なり。

◎教育時論第四九〇號　帝國教育會を論ずるや曰く、日々月々に同會の負債は增しつゝあるも、尙ほ今日に於ては、其地所建物の賣買價格迄には達せざるべし、故に今に於て其の建物を賣却して、其負債を償還し、恩賜の地は之を宮內省に返上し、見事に之を解散せざるに於ては、遂に其建物は勿論恩賜の地迄も之を賣却せざるを得ざるに至るべしと」衰へたると亦太甚しからずや。

◎日本農業雜誌第百十七號　高野豐吉氏が人造絹絲の鑑識法を列擧せし中に、其の尤も平易なるものを拔摘せば曰く、人造絹絲は、ツヤ多過ぎる。燃す時は酸性の烟及臭氣を發せず。水に浸せば大に强さを減ず、

◎京都府教育雜誌　黑田俠、豐太閤に對する演說筆記中に曰く、德川氏の政治は大抵織田氏の製を襲用し武田氏の遺風を參酌し租稅の徵收最輕く水利の水獎は武田氏に傚ひ儀式は足利氏のものを用ひたりと。

◎ほとゝぎす第二卷第二號　獺祭書屋主人が古池の句の辨遂に佳興に入る。其の連歌以來古池の句に至る迄の蛙の句を列れたるなど、文士理士同もに常ならぬ感興ならん。

◎女鑑第百六十九號　故實禮節に精しかりし有住齋氏死去に付其の畧傳を載す。

◎教育公報第二百十七號　文科大學心理學實驗室觀あり其の一兒童玩具の蒐集に云く此れは兒童心理研究の材料として目下蒐集中にて既に蒐集されたる中にも珍しき物を見受けぬ猶ほ全國各地方の物より古來の物に至るまで廣く蒐集し視覺を喜ばすべきもの聽覺を樂すべきもの又は觸覺に訴ふべき物等の類を分ちて分類せらるゝ由玩具の目的はもと兒童を樂ましめ其好奇心を起さしむるに在りと雖も中には父兄の意にかなひ其趣味を理すべき者もありて玩具蒐集によりては獨り兒童の心理現象を知り得るのみならず玩具の沿革と共に人情風俗の變遷をも詳かにするを得べしといふ(記者曰く近松の戲曲に「鬼の念佛に餓鬼けほふ殿の頭へ梯子さいて月代そる大津繪藤の花のお山も買おらすけほうさのゝ繪を買にはあの樣に鬚の白髮になるまで長生しおる端相鬼の樣に達者で金持で世界の人を餓鬼の樣に遣からましおらふ吉左右じや」といへるが如きをいふならんか因に記す外神田大時計のあたりに大八車を商ふ、淸水なにがしと云へる人は全國各地方の玩具は勿論幼き頃の玩具に至るまで洩す處なく蒐集し所藏せりと若し後日此人の承諾を得て參觀することを得たらんには吾人は報道の勞を取ることあるべし)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

片々

◎京都日報　曰く女子教育の不振今日より甚しきはなし、吾人はこれを男子の心性の墮落を示すものなりと認むと。

◎群馬縣の公娼問題　群馬縣に先頃またく公娼設置の問題起りたるが、前知事草刈親明氏は、斷乎を以て其設置を許可したるより、行政法に抵觸して、爲に官を免ぜられ、吉雄齋門氏代りて知事となり、直に設置の訓令を取消す。

◎蕃人の家庭教育　臺灣島の蕃人が總じて馘首の悪習に悩む所以のものは彼等は自然の境遇上土人を蔑視するの止むを得ざる事情あると、他の一方に彼等が家庭の教化與かりて力ありと云ふべし。今[illegible]警務署管内に於ける蕃人の風習を見るに概して夫の北蕃に比して此の悪習慣の度甚きが如しと雖も、去りとて此事なしとは限らず。而して吾人等が此馘首に對する家庭の習慣を聞くに彼等若し首級を得たるときは、先づ社内の雄鷄に之れを示し盛んに馘首者の功勳を社中に說示するを以て例とするなり。是れ所謂胎教に屬するものにして、其胎兒が將來に勇猛なる鉾兒たらんを願ふの意に出るものと知るべし。偖其の生兒男子ならんには、朝夕稚兒の行末武勇なれかしと祈念して、其漸く步行し得るに至れば、弓矢刀劍を執り、首級を獵る方法を教授し、其他兒守歌にも悲壯なる馘首の樣など謡はざるはなし。去れば其兒の後に成人して馘首し來る時は父兄は勿論一社擧つて之れを祝賀し、男女老幼酒宴を張つて勇ましく馘首の曲を歌ひ、且つ舞ふなり。渠等が殺伐の氣風又偶然に養はるゝに非ざるを見るべきか。（臺灣日々新聞）

◎女學校の風紀　大阪高等女學校長は或る人の問に答へて曰く當校にては極めて質素の風を養成せんと大に盡力したる結果殆ろ其功を奏せり。但し此風は校外にまで及ぶこと容易ならず、殊に當市の習慣として綺羅を飾るは勿論、紅白粉の粧ひ中々盛んにして學校の節之を落し來るも時の逃りに偏頗日粧飾せし顏を留むるものあり。月曜日は殊に之を多しとす、以て家庭が如何に學校の方針に異るかを知るべし。又當校にては教員生徒ともに常に綿服を用ひ、式日のみ金巾紋附を用ふるの制を取り居れど、若き女教員は何分金巾の紋附にては學校以外の式場に臨むに不都合なる場合あるにつき、紬にせられたしとの事ゆゑ是は許すことにしたり。又當校生徒が紫紺の袴を用ふるにつき世間に異の評ある由なるが、右は初め和繻子張りのものと一定せしに、生徒の父兄より和繻子張は肉湿易く其上破損し易きを以て却て不經濟なれば紫紺を許されたしとのことにて許すこととしたるも之は研究すべきことゝ思ふ下駄は利休下駄の外は許さぬ事になし居れり、出勤は百に對する九四、四の割にて此十一月前月よりも進み居れり云々と。（やまと新聞）

◎婚禮奇話　京都府下にて紅葉の名所といはるゝ高雄、栂尾を控へたる梅ヶ畑村の婚禮こそ面白けれ。多分は往昔御所方の女臈など此村に嫁ぎ來て、其夫を呼捨てにし頤にて追使ひたる慣はしの今に遺りしものなるべしとぞ。左れば婚禮の夜は、先づ普通の如く九獻の盃を濟し、扨花嫁は席を進めて「來たぞえ」と鷹揚に云へば、婿どの少し頭を下げて「來てたもつたかや」と挨拶し、次ぎに嫁御は兩親兄弟扨ては親類の人々に向ひ、又も「來たぞえ」と言葉をかけ、一同は聲を揃へて「來てたもつたかや」と兩手を突て畏まるなり。然るに頃日同村の川添某と、同府中葛野郡川島某の娘キヌ(十八)との縁談芽出度く整ひ、愈々輿入れの日も定まりしが、山本方にては豫て梅ヶ畑村の習慣を心得居れば、郷に入ては郷に從への諺へもあり、萬事彼方の儀式にて遣つて退けずばなるまじけれど、キヌは平生内氣なれば、例の「來たぞえ」を失錯ることのあらんも知れずと、態々梅ヶ畑より世事馴れたる老婆を雇ひ、婚禮當夜の秘書を頼みしに、扨愈々輿入れの當夜例の挨拶の一段となりて、キヌは「來たぞえ」を云出し兼ね顏を赧らめて口籠りしが、俄に思ひつきて「参りましたぞえ」と小聲にて述べたり。婿どのヘッと當惑して返答に差支へたるが、忽ち座を少し下りて兩手を突き「克う來てたもり遊ばした」と挨拶せしにぞ媒酌人を始め座に在りたる一同思はず噴出し、果ては大笑と成つて目出度く婚禮を濟したりとか。（大阪朝日新聞）

◎婦人會演説會　近頃府下の二三の基督教會の婦人會にて、婦人の爲めに演説會を開けるは、近頃珍らしく覺えたり、今後此種の演説會は、いよ〳〵多くなるべし。

◎西洋人　の言に曰く、佛國の植民事業は、先づ公園を開き、英國獨乙は商業を以てし、日本は淫賣婦を以てすと。

◎閨閥論に對する批評　本誌前々號閨閥は女學の敵に對し、▲万朝報は曰く耶蘇教の系統に屬して十ツ覺き所なく、十年女學の爲めに苦闘して倦むを知らざる巖本善治君の、女學雜誌は、一種の議論、一種の筆法を以て鳴る、その近刊號する所の▲閨閥は女學の敵と題する一篇の如き最も其特色を見るに足る、先づ閨閥の意味を說き

閨閥とは閨門の閥なり細君の緣邊に寵信を掛け其の血すぢに仲間を結び倚つて立身の土臺となす之を閨閥の工夫となす……

と云ひ其實例を示さんとして曰く

試みに帝國大學をもて一例とせん此大學は學文の淵叢と稱し日本第一の學者の集り居る所と評判すればなり然るに其卒業生が赤門を出でゝ金ボタンの洋服を脱がんとする最初の理想の一は巡に閨閥の緣しに取つき願くは何々爵又は何々

紳商と言はるゝ程のお洒れに捌りたしと慾望するにありとぞ……
去れど憫むべし笑ふべし利を以て唯一目的とする閨閥の佻謔は決して幸福なるものに非ず

凡そ斯の如き佻謔に耽けしき交りとては斷乎てあるべからず何となれば男子は男子らしき保護者の氣節なく勇氣ある愛情もなし、甚に從順なる慎みなく床しき情愛もなし……

啻に不幸不吉なるのみならず、女學の爲めに甚だ忌ふべきものありと爲し
若しも世上の男子に殊勝の心掛ありて女を選ぶに其學と其德とを標準にするやうならば天下の女子競つて其品德を修め女風之より改まり女學之より起るべきに、悲しい哉今の男子は前述せる卑屈根性にて初めより此樣なる心掛もなく但閨閥の私ならば其學も德も問ふ所にあらず希くは容貌丈けにても美ならんを願ふ……

然り然り、滔々たる若き當世男子の胸中の秘密は斯の如し、われは女學子の爲めに万斛の涙あるを認め、深き同情の思を寄す。

▲土陽新聞は曰く　近時男子志を立つるに、已が手腕に依らずたゞ單に妻君の縁邊によりて、立身せんとするの傾向を慨嘆し、議論頗る凱切世上輕薄才子須らく一讀して恥づる所を知るべく、賢良の淑女は大なる同情を發見すべし

▲法雨新聞は曰く　當世才子と云へるもの、財をあさり盡せり。閨閥とは自己の結びを擇ぶに財產あり官位あり身分あるものゝ娘を以てし、之れに依て立身の土台を作らんとするものを排斥し終りに窈窕たる淑女はそれ誰れに嫁がん、男子の奸佞速かに一掃せざれば女學も遂に其報ひなきに泣かんとするのみと論ぜり、吾輩大に意を同ふす。

▲紀伊每日新聞は曰く　妻君の袖にすがりて立身の基となさんとするもの、妻君の因縁に依りて富貴を求めんとするものを罵倒し、大に閨閥の非を論ず、殊に快絶

⊛女學文明雜俎(本號〆切まで)

◎日本服制論(松陽)	大分新聞十一月廿七八日
◎先づ奢侈を去れ	岐阜每日新聞十一月廿七日
◎華族考	日　本　新　聞　連　載
◎外國女子の恥らざる理由	京華日報十一月二十五日
◎女子教育の退步は何の徵ぞ	京華日報十二月二日
◎幼兒に衞生の道を教へよ(婦人矯風會員某)	讀賣新聞十一月廿七日
◎我邦儒界の香聞(九龍書屋主人)	同　　　　日曜附錄
◎幼兒の通性(岩谷貞太郎)	女子の友第卅　四　號

時報

◎皇后陛下華族女學校行啓　華族女學校にては、去月十九日第七回秋季運動會を開きたるに付、　皇后陛下行啓あり、同時に常宮、周宮、富美宮、貞宮の四皇女殿下も御成ありたり。

◎皇后陛下横須賀行啓　皇后陛下には、去月廿八日横須賀軍港に行啓遊ばされ、同軍港碇泊の新造軍艦天龍御覽あらせられたり、また當日は文武官夫人にも陪觀を許されたり。

◎皇后陛下の御美德　皇后陛下の、夙に女子教育に御心を添へさせらるゝ由は、殊に洩れ承はる所なるが、今回華族女學校にて從來の月謝は他に比し頗る低廉に過ぐる嫌あれば、增額しては如何との議起り、自然に上聞にも達せし處、陛下には校費不足ならば何程にても補助し遣はすべきにより、增額の議は一先づ中止すべしとの御諚あり、尚同時に生徒の服裝は總て質素を旨とし、進んでは生徒自ら驕奢の風俗を矯正するの心得なかるべからずとの御諭をも下し給ひし趣に承る。(國民新聞)

◎皇女同聲會御成　常宮、周宮の兩內親王殿下は去月二十日午後一時半、上野公園音樂學校に催されたる同聲會の音樂會へ成らせられ、唱歌、ピアノ、バイオリン、箏樂等、數番の演奏を聞し召されしよし。

◎横濱高等女學校設立の建議　横濱教育會にては、曩に神奈川縣知事及橫濱市長に宛て、高等女學校設立の建議書を差出したる由なるが、設立費は三萬圓の豫定にて、地所は豫定の尾町なる高小學校舊地跡を拂下げ、他に適當の場所を選定する筈。

◎兵庫縣高等女學校設立案否決　兵庫縣縣議にて神戶に一高等女學校を縣立せんとするは、二三年來の問題なるが、今年も又た、同案提出せられしに、縣會にては之を否決したり。

◎日本弘道會女子部例會　同會は去月廿七日九段坂上偕行社に於て開會せしが、來會者百卅餘名にて野口保興、大森角之助兩氏の演說、清水清風氏の天正年代以後の小兒の玩具雛人形諸侯奧女中の細工品等を陳列して說明せる等近來稀なる盛況なりしといふ。

◎長崎婦人會總集會　は去月十二日大村町貿易集會所に於て開會せられし由。

◎福井縣の三特行者受賞　福井縣知事は先般、左の三婦人に對して、賞賜せり。

足羽郡上文殊村生部木村茂平妻　こ　さ

資性溫厚にして孝貞明治十七年中姑病に罹り漸次重症となり男本老疾を發し起臥自由ならざるに克く看護し孝養至らざるなく家計困難の中に在りて嗜好を

供し看護の餘暇あるに於ては夫の農事を助け傍ら子女を養育す不幸にして去廿四年中姑歿し本年別亦歿す十有餘年の久しき志操の堅き一日の如し洵に奇特とす依て爲其賞金五圓下賜候事

明治三十一年十一月十日

坂井郡高椋村尚島頭石尾秀太郎母　た　ま

天性篤實明治二十一年中故石尾源右衛門の妻となりし以來克く姑夫に事へ姑晩病を發し終に盲目となり夫亦疾病に罹り漸く重症となり起臥自由ならず去二十年六月中終に歿し今年十一月中姑亦た歿す茲に十年の久しき克く兩人を看護し毫も倦怠せす撫養せらざるなく洵に奇特とす依て爲其賞金三圓五拾錢下賜候事

明治三十一年十一月十日

大野郡下庄村横枕野尻源右衛門妻　さ　み

夙に慈善の志篤く金員を投じて貧民を賑恤し殊に公共金員を寄附する數回實に衆庶の模範たり依て爲其賞木杯壹個下賜候事

明治三十一年十一月十日

◎奇特の老下婢　熊本縣下益城郡豐田村木庄政雄方附籍田上ヨ子(七十七)は、弘化四年廿三歳の時政雄の祖父喜源太の下婢となり、中頃故ありて一度暇を乞ひしも、其後再び本莊家に傭はれ、當主政雄に至る迄三代に仕へて五十餘年の久しき一日の如く、幼兒を傅育し耕作蠶桑に從事し、能く主家をして餘裕を生ぜしむるに至りしかば、其筋にては其奇特を賞し此程金五圓を下賜したりしとぞ。

◎富山縣孝婦の葬儀　嘗て內閣褒勅局より孝貞の廉を以て、綠綬褒章を下賜せられたる富山縣中新川郡大森村大字四大森村の森井岩次郎母きのは去月死去したるを以て、其十二日其葬儀を執行したるに、縣知事代理、郡長代理及び郡衙吏員等之に會して、祭文を捧げたりといふ。

◎貞婦受賞　岡山縣上房郡、川津村小野鹿蔵妻ゑは資性温順嫁後夫の眼疾に罹り、兩眼を失し起居自由ならざるを貧苦の中にありて看護に力むる十年一日の如く洵に奇特の事なりとて、知事高崎親章氏より金三圓下賜せられ、又た二十一日同地今津小學校にて盛なる賞狀授與式を行へり。

◎孝子の賞與　極貧に處して、能く篤疾の老父發狂の母兄弟を扶持し、殊に海嘯に際して家族の難を救ひし篤行者は岡部忠平は此程岩手縣知事より賞金五圓を授けらる。

◎孝子旌表　石見國邑智郡都賀行村高梨壯太は資性温順にして父母に孝を盡し明治二十年父が不治の病に罹りたる時は、寒餅撫養到らざるなく、次て母も亦病氣となりたるを家計窮乏の間にありて、親切に看護すること、十餘年なりしが、去月廿八日縣廳より、奇特として賞金三圓五十錢を下賜せられたり。

◎美談一束　孝貞　鳥取縣岩美郡津の井村森原すみ(四十七)(鳥取新聞十一月七日)●貞女懷死を企つ　東京府北多摩郡三鷹村字牟禮の亡淺野清次郎の妻お龜(二十六)(東京朝日新聞十一月廿九日)●恩に報ふ　海軍少佐濱野恭識(千代田新聞十一月廿九日)●主人の死を悼みて尼となる越後與板代議士三輪潤太郎母堂女婢小柳りえ(六十一年)(新潟新聞十一月十六日)●感心な少女　肥後菊地郡清田村大字久保田の志垣某老婆が血緣の少女矢野岩(十二)志垣はじめ(十三)の彼老婆に對する厚篤なる看護(やまと新聞十一月廿七日)●入水して夫を諫む　府下千駄か谷村の若園末吉の妻ヨノ(三十八)(時事新報十一月十九日)●感ずべき節婦　土佐國土佐郡地藏寺村字石原伊藤諸兵衛妻ゆう(三十五)(土陽新聞十一月廿九日)●つたもみぢ　埼玉縣秩父郡大瀧村岡田某の妻ひさ(四十七)の貞節(中央新聞十一月廿九日)●工女の龜鑑　阿波紡績會社の工女柳澤たか(十九)貞條ひで(二十)(內外新聞十一月十九日)●所謂義の爲に死す　千葉縣銚子町の漁夫田邊寅松(二十)(新總房十一月十六日)●小川村の篤志者　岩手縣下閉伊郡小川村大字穴澤工藤定治(岩手日報十一月十五日)●孝子　大和國宇智郡宇智村平井庄藏(十四年)和歌山新報十一月十日)●岩內の孝子　北海道岩內郡發足村番外地小田音吉(二十九)(北海新聞十一月十八日)●河内五郎平氏の美擧　新潟縣三島郡脇野町村桝掌端河内五郎平(新潟新聞十一月十五日)

◎孝子に和歌を贈る　秋田縣南秋田郡、豐川龍毛なる黑澤利八の夫婦は、兼て孝行の聞えあり、先年平山同縣知事より、其孝養を奇特なりとして、賞狀及び賞品を下賜されし事もありしが、其孝德は何時しか遠く帝都へも傳はり、本年七月祝所敦子女史より左の和歌を利八夫婦に贈られたりと云ふ。

おやの爲めつさめてやまぬ眞心の
光りや人の鏡なるらむ

◎日本美術院分教場　東京湯島天神町の同教場は、いよ〳〵女子部に充つることなり、跡見花蹊女史、之が主任となるべしといふ。

◎茨城縣の女學校　は二十年の昔師範學校に女子部ありしも、廢止以來は小學以上に女子を教育する所なし。近頃當路者は縣教育會の建議を容れ、久木縣屬を國縣へ派出して、高等女學校設置の工合を取調べしめたれば、或は來る十一月の縣會には議案となりて出づへしといへど、中々由來不熱心なる縣會は急ぐまじ。然れども兩三年來水戶に裁縫を專に教ふる大田裁縫學校なるものあり、頗る隆盛にして本縣小學裁縫教授などには非常なる改良の機運を與へたり。要するに高等女學校も裁縫作法家事等の時間を多くして、本縣各郡の都會地集合せる裁縫稽古の女子を勸誘して入るゝ樣にせずしては駄目なる學文の校にては入學者あるまじ。女子學校設立には此の充分の注意を要す。(教育報知茨城通信)

あざ拔新法

◉故茅根清吉氏は舊水戸藩士、維新前後國家に盡し、事蹟尠なからざりき明治四年初めて痣の新療法を思ひ立ち十二年頃全く家事を擲ち足跡殆ど海内に普く一心不亂に藥物の採集と治療の方法とを研究して家政全く傾き一身落魄し果てけるが計らずも高島將軍の聞く所となり爲に三年間衣食を支給して研究の便宜を與へしめられき

◉氏が立志の原因を語らんに氏の親友某面部に大なる黒痣ありき人々に爪彈きせられ妻を迎ふへ年頃となりても誰一人嫁がんといふものなく良賢といふ良醫に就きて治療を乞ひたれど孰れも不治の症なりと謝絶せられ涙の中に月日を送りけるを氏は心太く其の不幸を憫むの餘り男子の醜は猶忍ぶべし世には女子にして此患に罹り外出すら憚りて一生を不愉快に終るも多く不治の病と一括して醫家の取合はざるこそ心得ねいで此不幸の人々の爲に治法を發見せんものをと深く其志を決しけり

◉あらゆる考案を經たる後試驗に用ふる資料には婦人の經水こそ適すらめと自ら思ひ定めて妓樓に遊び懇を娼婦に結び經水を獲て歸りしは明治十一年頃の事なりき

◉氏乃ち採集したる藥物の中より二十餘種の藥品を選びて之を精製し純白なる粉劑となし十二年初めて之を患者に施し奇効を奏しけり

◉氏が十年の久しき艱難辛苦を經て漸く發見したる藥品は純白なる粉劑なるが其用法は先づ水にて溶解し患部に塗布するに在り塗布一兩回にして患部の上皮自然に剝脫す引續き塗布し五回すれば患部の全體に痂を生じ日を經るに從ひ痣は漸次其痂と共に剝脫するなり輕きは一週間、重きも二週若しくは三週間にして痕跡を留めざるに至るといへり

◉氏は折角以上の發明を完うしたるものから研究の中途苦心焦慮のため大に健康を害し肺患となり東京神保病院に入院せしが終に本年八月十二日六十二歳を以て不歸の客と爲りき

◉痣の新治療家故茅根清吉氏が遺法を直傳せりといへる大石保氏今當地四長堀鰹座橋畔の野村方に出張所を設けて此新治療に從事し當來醫家の匕を投げ居れる世上幾多の痣に困める士女が精神上の痛苦を拯はんとせり

◉茅根氏は生前氏に其製藥の術と治療の方法とを舉げて教授し置き大石氏は其後米國へ渡航し桑港へ在りて獨逸のドクトル、イエリチック氏の腕の文身を拔取り次でムーレー孃の痣をも拔取りしと聞けり（十二月八日、大坂朝日新聞）

右　大石保

明治女學校受捐金報告

金貳百圓也　東京　阿波松之助君
金五十圓也　同　角倉賀道君
金參十圓也　同　小池靖一君
金五十圓也　播州明石　湊健一君
金十五圓也　甲斐　廣瀬和育君
金十圓也　同　淺尾長慶君
金十圓也　栃木縣　福田喜三郎君
金二十圓也　札幌　廣井勇君
金二十圓也　同　後藤顯美君
金二十圓也　島田操君
金十圓也　同　坂本俊健君
金十五圓也　同　田邊朔郎君

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日逓信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日逓信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY